253
437

085335-000-7

特63-479

雪月花

中川　愛氷／著

M40
DBC-0302

特63
479

雪　月　花

目次

加茂の川風　一
花十枝扇　一四
重ねもろ松風　一九
夏解け初め　二四
雪　二五
秋　二六
天王橋　二九
斷琴　三二
春居　三三
朝記　三六
顔日煙　五八
芝家の夢　一〇三

10 4 6
内交

目次

菊……一〇五
肱……一一二
振……一一九
春……一二三
夏……一二九
星……一三四
田……一五五
手……一七六
雛……一五七
少……一八二
仇……一九三
貸……一九七
秋……二〇七
冬……二一一
俗……二二五
つ……
分……
の……
の……
月……
の……
新……
舎……
鞠……
妓……
又……
女……
し……
野……
の……
二……
の……
の……
骨……
歯……
さ……
髪……
歌……
歌……
夜……
年……
歌……
平……
畫……
露……
階……
歌……
歌……
集……
終

雪月花

加茂の川風（上）

中川愛氷著

智恵のない人金を儲けて。醜男が美人を女房にすること。不思議でもなんでもなし。説明するも野暮なれど。智恵のない人は。とても何の藝も出來るものではない。から金でも拵へやうといふ一心で。一生懸命に黒くなつて稼ぐ。稼ぐに追付く貧乏なしで。詮方なしに蛭子様がたまる。又醜男は決して女に惚れらるゝものではない。から美人と見ると有難いものに心得て。浮氣などは藥にも出來ず。それに就て自惚といふ厭味もない。たゞ一方に熱中するといふ有様で

詮方なしの辨天樣が出來る。であるから藝の出來る。女に惚れらるゝといふ事は。人間の不幸福かも知れない。

女が惚れて藝が出來て。年中ピー〳〵風車の。池大雅堂といふ男がある。玉蘭を初め幾多の美人に思はれた話は。暫く預り置く事として。此男は繪畫に堪能であつて。其名が早くも洛中洛外に廣がり。遂には日本全國誰知らぬものもない程であつた。であるから諸國に飾付けてある大名達は。此男の繪畫を贅澤物の一つとして。此男の一筆に千金を惜まぬ程であつた。併し此男が其等の金に目が眩んで。繪心を臺なしにするほどの幸福者でないから。氣に向けばロハでも書くが氣が進まぬと來た日には。千兩萬兩目の前に積んでも。うるさいとばかりで。なか〳〵急ぐ間には合はぬ。かういふ鹽梅であるから。更に金儲けにはならず。もと〳〵財産がある譯でもないのだ

から。勢ひ米櫃にも影響する。それ等を何の絲瓜とも思はず。衣裳は着た切り雀尾羽打枯らして。お宿は堀川邊でお俊傳兵衛君の隣九尺二間に雨月漏りのあばら屋。臺所の隅に蓬が生へて。其傍に瓦三枚の屏風圍に。鍋釜兼帶の焙烙一つ。これも大方蜘蛛の網を張るに任して。板朽ちに流元に。魚の頭。葱の尻尾など堆くなつて。水の融通少しもきかず。お負に身体の洗濯が月に一度。居間の掃除が大体三月目に一度と云ふありさまであるから。此男に家を貸した家主さんこそ迷惑。その中に閑居して不善をなさぬ所。兎も角も大人物である。

女房を娶るは厄介なり。傭人は居付かずといふ。まだ此男が獨身のとき。朝飯ぬきの晝飯時となつて。自炊するも面倒と。戸締りに安心する我家を出で。七條の通りをぶら〳〵と。馴染の温飩屋へ行か

うとする途中。無頓着者の眼にも入つたは。此男が遠縁の親類で。近江屋源兵衛といふ糸屋。代々繁昌し來つた煖簾を。放蕩息子の爲にはづされ。其日は借金の片付けにとて。身代物の競賣をせんと。其用意の最中であるから。見捨てゝも行けずと。腹のすいたのも忘れて。『御免下さい』と訪ふた。すると此男は變人と名を付けられて親類中誰一人相手にするものもない位であるから。折も折。此取込みの中へ貧乏人が舞込んだと。主人源兵衛にがゝしくは思ふたれど。まさかに何をしに來たともいはれず。『これはようお出でなすつた。さアお上りなさい』と。通り一遍の挨拶をしたばかりで。茶を一杯汲まうでもなく。何一つ話かけやうとせぬもので。此男即ち繪畫の名人大雅堂も。まんざら無神經ではないから怪しかる事とは思ふたれど。多寡が算盤玉はじくより外に能のない人間を。相手にして理

屈いふゝ大人氣なしと。さも平氣に家の樣子を見て居ると。何れも身代を早く人手に渡さうと。夢中になつて騷で居るのだから。大雅堂も見かねて。更に取合ふてくれぬ源兵衛に。『親類のこの私に。けふの事をなぜ知らせて下さらなんだ』と一理屈はじめる。源兵衛せゝら笑うて。『成る程それは手ぬかりであつた。併しお前さんに知らせてあげた處が。何の役にも立つまいじやないか』と。さりとては見下げた言種。大雅堂強いて氣にはせぬが。態と怒を裝うてそれはおぢさんのお言葉とも思はれん。ハゝア何の役にも立たゝぬと仰るのは。私に身代をたゝき賣てしまふ腕がないから。成程それもさうであらう。わたしには茲にならべてある品物を。賣らぬ工夫はないかといふ相談なら。それは隨分出來ないではないが。外の御親類方のやうに。喰ひつぶしに來て賣こかして仕舞ふなんど。どうもさう

いふ不人情な眞似は出來ぬから』と。人もなげに氣焔を吐く。すると間接に罵倒されたる。同家の親類平八といふは。少しは話せる男で。かねて大雅堂の腕前を知つて居れば。此際何が利用する道もあらうと。ひどい事をいふ奴と思ひながら。にがり切つて居る源兵衛をとりなして。『なるほど。傍で聞て居ましたが。大雅さんの仰る事は一々御道理。なにゝしろ斯ういふ騒ぎでございますから。ツイ御沙汰もしませんで。どうも重々不都合でございます。當家も御存じの理由でお見掛の姿でございますから。どうか御名案でもどざいますれば。聞かして戴きたいものでございます』と。いつにもない甘口をならべるに。これまた小癪にさはらぬにはあらねど。今の場合それを彼是論ずる時ではない。たゞ疎まれても親類の好誼。この窮狀を救ひたいといふのであるから。『承知しました。拙者に名策があるから。兎も角も店に飾つてある道具をお片付けなさい』と。以ての外の言葉に源兵衛はもしや大雅堂が狐にでも誑まれたのではあるまいかと。横合から。『それにや二百両の金がなければ』と露骨ないひやう、大雅堂は委細搏はを。『それも承知じや。しかしまだ朝飯もやらぬのじやから。何か御馳走を』と。こゝらが呑氣の行止りであらう

（中）

越えて三日目には。池大雅堂か五條の橋の袂で。辻畫をかくといふ廣告が。所々方々に貼出されたものであるから。名人の筆を執るところ。見るだけでも話のたねと。五條の橋の上は。卯の刻より人の黒山を築いて。大雅堂の店出しを今や遲しと待つて居る。此方には近江屋の源兵衛。今日の景氣はどうであらうと。件の場所へ樣子を見に出かけると。右の始末にて非常な人の出であるから。大さうな

人氣だと殊の外感服をして。其趣きを大雅堂に話すと。大雅堂はすましたもので『それはおぢさん分つた話じやないか』。兎も角もそろ〳〵出かける事としやう』と。手傳の男二三人引連れて。やがて五條の橋に着きにけるとなるほど。かねて評判の搗はぬ屋ではあるが。十二月の下旬になつて。世話する人も世話する人で。先づあきれ返らざるを得ぬは。浴衣の裏打したる上に。裏付の蚊屋紹を羽折つて。更に頓着しないのである。さて役員は一人は紙を取出す。自分は筆を執る。一人は印を捺す。一人は金を受取るといふ鹽梅に。それ〴〵手分をして仕事に取りかゝる。所が如何に辻畫とはいへ。棒二本引いてこれは火箸で候。丸を拵へてこれは輪で候。四角なものを造つてこれは裁板で候といふ有樣であるから。誠に其畫はお麁末なものである。併し落欵の眞價が大したもので。描きたまらぬ程金子にな

つて飛出すものであるから。會計課長は目を舞はすほどである。斯くて三日間辻畫を描くつもりの處。二日目の午頃に至つて。既に二百両以上の金高にのぼつたものであるから。一方で『ゐらいものじややは。二百両の上を出た』と。思はぬ小聲で饒舌つたものだから。大雅堂はゝやくも耳に入れて。『さらば役目は相濟んだ』と。忽ち筆の手をとめて仕舞うた。すると人は意地なもので。いま一枚もう一枚と。金に糸目をつけぬ望人が降るほどある。されど大雅堂は早くも繪道具を片附けて。跡をも見ぎにすた〳〵歸つて行く。そこで驚いたのは多くの客衆より。慾氣の離れぬ手傳の人々で『何とした氣の利かぬ人であらう』とは。飛んでもない罰當りなれど。このお蔭で近江屋は家勢を挽回して。再び大煖簾を翻すやうになつたものであるから。常に大雅堂大明神の御利益を唱へて居る。

此逸事誰云ふとなく。世上に噂高くなつて大雅堂の名は日の出の勢ひとなつた。されど相も變らぬ呑氣者で。一茶の所謂何のその百萬石も笹の露と。貧乏性はぬけぬものであるから。あたら好男子も煤にくすぶつて。いたく年頃の娘に氣を揉ませたるが。此男に一番惚れこんだるは祇園町の才女百合で。一人娘のお玉といふのを。是非女房にして貰ひたいといふので。人傳に大雅堂へ右の趣きを申込んだ。其お玉といふのは名詮自性實に無類の美婦人で。公卿高家の公達。大店の若旦那などに。男を下げさせた事もあつたが。蓼食ふ虫の世にはあれど。妙な人好みであると。大雅堂は寢耳に水のいたく驚いたが。もとより獨身で終るほど世を厭ふものでもなければ。自分の技量に於ても自負心のないではないから。天より我に授けたる美人。お受け申さぬも恐れ多しと。強いて好ましからぬ緣談にも

あらねど。さりとては天下の美人を迎へるほどの用意は。何一つとしてないのであるから。まづ拙者の宅から御覽の上で更に御申込を願ひたいと云ふので。百合はそれをお氣にするほどの。氣小なお方とは思はなんだと。流石にうた娘とうたはれし女だけに。なか〳〵腹の中が垢抜して。人物の或點に於ては。大雅堂より役者が一枚上の所もある。何にしても厭と仰せられぬは千万有難しと。緣談は速にとゝのひ。末は誰が手活の花と。千人に氣苦勞させし祇園町の美玉は。遂に京の田舍の貧乏人の手に落ちた。さてお玉を迎へた大雅堂の家は。冬枯の空より俄に春に移つた趣きがあつた。そこで近所での評判をきくに。花嫁だけに臺所は昔のまゝで。何となく塵溜に鶴が下りたやうなと。蓋し岡燒も其中にはまじつて居る。實に似たもの夫婦といふは。此時から始まりしものか。妻君お玉は母百合の

仕込によつて。香花茶の湯などのはした藝はさらなり。讀書裁縫の業も人にすぐれて。歌でゝろ書でゝろなどの氣高き處はあるが。育ちし場所柄にもなくぞべりとした衣服をきらひ。其他すべて。手數のかゝる見得を好まぬから。間がな隙がな良人を師匠にして。書の稽古は怠たらぬが。箒を手にとることなどは。珍らしいものゝうちに數へてもよい位であるから。云はゞお玉の興入した日より。引さがし人が殖えたやうなものである。斯る鹽梅であるから。夫婦中の睦まじいことは。二階の鼠を初めとして。誰羨まぬものもないほどである。であるから偶々泊り客のある時などには。夫婦の寢道具をすつかり引渡して。夫婦戸板の下に書用紙にくるんで。暖き夢などに入ることがある。兎かくするうちお玉の書はます〳〵上達して。號を玉蘭と呼びて。大雅堂と肩を並ぶる腕前になつた。されど夫婦

の呑氣さ加減は。幾年の後までもつきまとふたが。流石の大雅堂も呑氣に搏ばれない一事が起つた。それは餘の儀でもない。この度宮中に御慶事があつて。嵯峨の御所より書師の人撰に預り。松上の鶴と申す課題で揮毫せよとの御沙汰が出たのである。

（下）

南洲と海舟とが意見の投合したる如く。早朝と深更とが時間の接近したるが如く。極端に呑氣なる大雅堂は。極端に呑氣でない處がある。即ち其呑氣でない處が大雅堂を。繪畫界の大立物にしたる所以で。繪畫に就ての苦心經營は。到底尋常の人の及ばぬ所である。であるから。平素一枚の紙を黑くするにも。苟も筆を卸さない。ましてや天覽に供し奉らんとする。一世一代の手腕を揮はうとするのであるから。殆んど半ヶ月ばかりは。寢食を忘るゝばかり夢中になつ

て百方意匠を凝したるが。遂に苦心空しからずして。一つの名圖案が出來た。ヤレ嬉しやと小躍して。いざ一氣呵成すべしと。墨の用意は滞りなく出來たるが。まさかに畫箋紙にもかゝれぬので。絹地となるとなか〳〵買置きをするほどの餘裕がない。折の悪い時は仕方のないもので。其日には小遣錢にも困るほどであるから。あたら名案も空しく腹の中で嗚咽流涕して居る。これが間に合せの畫師であれば。御褒美を當て込んで。他より預りの絹地に。手も附け兼ぬ所であるがそんな卑劣な心はすこしもなく。自分の無一物はすこしもなれど。妻君の身の廻りまで無一物にしてのけた跡なれば。金策の道は全く絶えて。實に心外千万であるが。舊恩を肩に着て近江屋へ走るほどの勇氣もなく。また出來ぬと知つて女房に氣を揉ませるでもなしと。意地骨は突張つて見るもの〻日限は一両日にさし迫つて

居るし。如何にせばよからうかと呑氣畫伯もなか〳〵呑氣では居られぬ。詮方なしに。注文の用紙に十八番の富士を描いて。漸く絹地二枚の代を得たから。これで一安心と。例に依つて妻君に取敢ず買はせにやる。其日は非常な大風であつたが。玉蘭更に厭な顔もせず清水坂の繪絹屋まで出かけた。歸り途に五條の橋へかゝると。頃は帥走もはや半ばを過ぎて。加茂の川風がピユー〳〵と吹き通つて居る。折ふし何處よりか木の葉がパラ〳〵と飛び來て。碎くる波に躍つて居るから。忽ち繪心にかられ。寒さをも忘れ。暫く見とれて居る油斷に。辛うして得たる繪絹を一枚。無殘にも風に奪はれて。アレよと思ふ間もあらばこそ。波の上を高く低く舞うて。チラ〳〵と手にも取られぬ。又捨てられぬ風情があるので。殘り一枚をも好奇心に任じて。惜氣なく吹飛ばさせると。更に又一點の興味があるの

で。いつの間にか妙圖の腹案が出來た。これが後に玉蘭唯一の大作となつた。やがて時經て氣が付いて。宅には良人が待兼ねて居るであらうといふにも。風に飛ばしたる繪絹が。大切な品であるといふことにも氣が付いた。しかしもはや後の祭りで。詮方なく手ぶらで我家に歸つた、すると。大雅堂は果して妻君の歸るのを待ち兼ねて居た『この寒いのに御苦勞であつた』と。そこは夫婦の情合でいたはると玉蘭は『さう仰せられては消ねて仕舞ひたうございます。大切な絹地。ツイ五條の橋の上で風にさらはれ。其飛びざまのおもしろさにうかり惜い事をしました。どうぞ御勘辨を』と。思ひもかけぬ始末。流石の大雅堂も大へごみにへごみたれど。それ位の風流心がなくては。到底名人にはなれるものではないと。痩我慢ながら思ひ返し。『さうであつたか』とばかり。又絹地の算段にとりかゝるに。玉蘭も

氣の毒になりて。『まさかの時にと思ふて。仕舞うて置いたお金がございます。いま一走り行つて參りますから。どうぞ御待ち下さりませ』と。又仕度して出やうとするので。大雅堂は呼ひとめ。『外ならぬ御所の畫であるから。何うも打捨おくわけにはゆかぬさういふ器用な金があるのなら。暫時借用して。こんどは己が行つて來やう』と夫子自ら出馬して繪絹を買求め。例の五條の橋を通行すると相變らず。加茂の川風。得意げに行人の袂を翻して居る。大雅堂も不知不識好奇心が出て。二枚のうち一枚は餘計な物と。試に風に與へて見ると。玉蘭の風流心を誘ふたも無理はない。實に得も云はれぬ風情であるから。猶一枚をと思ふたか。フト心附きて無事に松上鶴の名畫となつた。

花十枝

都の花

そよ吹く風も芳ばしき
すみたづゝみの春の空
見らるゝ花に見る花の
これぞ都のにしきなる

曉花

あかつき告る鐘の音に
短かき夢やさましけむ
霞のそでをかぞしつゝ
ねむげに見ゆる花の顔

月前花

今を盛りと咲きみちて
八重にたなびく花の雲
月のかゞみは曇れども
深き色こそうつるなれ

雨中花

糸よりはそき春さめに
靡くともなく靡くなり
袖は濡るとも立寄りて
一枝折らん稚子ざくら

糸櫻

野山を裝ふにしきをば
織出さんとや佐保姫の

はるの手染の糸ざくら
くる人おほし花ざかり

山櫻

目もはる山の奥ふかく
咲きにけらしな櫻ばな
吹來る風のにはばずば
雲か雪かと看すでさむ

山家花

都は散りてあともなき
花を見るこそ嬉しけれ
ひと里とはき山が家に
住居する身の甲斐有て

水邊落花

しづ心なく吹くかせに
誘はれて散るさくら花
蝶に追れてひら〳〵と
川邊に逃るしをらしさ

夜落花

立てる霞をいろどりて
咲にほひたるさくら花
夜の間の風に散果てぬ
惜む人には見せじとて

殘花

二枝三枝だみやま路に

散殘りたるさくらばな
春を唄ひしうぐひすの
古巣へ歸るしをりにや

重れ扇

《上》

塲末といふでもなきに。安き家賃の小意氣な家を見付け。小道具もおり〳〵と集めて。漸く世帶といふもの持つて見たれど。隙な時の手料理の外は大方隣りの婆アさんを煩はして。一日の骨休めにほんのりと一杯きこしめしたる時。機嫌上戸を喜ばせるものもなければ獨身者の氣樂とばかりでも濟まず。兎角物足らぬ心地のするにつけ

ても。思ひ出さるゝは日々仕事の行返りに。ふつと見初めたといふ意氣筋。併し相手は更に御存じなしで獨り胸を痛めて居る殊勝者。今宵も獨酌に誰をがな相手はしやと思ふ折柄。

『安さん自宅か』

と訪ね來しは。仕事仲間で氣の合ふた仲よしの松公。

『オヽ松ちやんか。いゝ處だッた。さア一献參から』

と。長火鉢のさし向ひ。さて女氣のなきは無造作なものなり。松ちやんの曰くは。

『今晩はチッと相談があつて來たんだが。ナアニ一仕事頼みていので』

と。其實は友達甲斐に。態と外へは廻さいで。受負の普請仕事を搾さ込みたるを。

『何か知らねえが。おめいの事ッだから。どんなことでも都合するよ』

と。安受負に受負ながら。

『夜が長いから緩くり食つていきねえ。何もねいが』

と。竹の皮より煮るものを取出し。焼立の鍋にジユーといはせ。互につゝき合ひながら。仕事の話も一段落つき。やがて酔のまはるにつれ。遠まはしに初めたのは。包んでも包まれぬ意中の人。

『ときにおめいの近所に仕立屋があるだらう。それお前の下宿の側で。四五軒先の』

と。念を押すまでもなく。

『知つて居るよ。時折着物を縫つて貰ふから』

と油斷のならぬ返答。

『そんなら娘の二人あるのも知つて居るだらう』

『それも知つて居る』

『お前眤近ぢやねえか』

『別に眤近と云ふじやアねえが。知つて居るよ』

と。いふはやゝ安心なり。

『一寸別嬪であらう』

と。猶も追及するに。

『さうさ。えらい熱心のやうじやが。氣に入つたら。お前もどうせ一人じやア困るだらうから。貰ふ話にしたらどうだい』

と。今はなか〳〵頼母しくなり。

『さう旨くゆくだらうか』

と早くも白狀。相方もおひ〳〵眞面目に。

『仲間で評判のいゝお前だから。話をしたら呉れぬ事もあるめい』と。まんざら見込のなきにもあらぬに。

『それじやアお前に橋渡しが出來るだらうか』

『見くびる勿れ。お前の頼みなら。どんな事でもして屹度仕遂げて見せるから。安心して居ねね。だが。お前の注文は。二人のうちどちらだい』

と益々よい風向。

『さうさ。出來るなら。妹の方を頼みたいね』

『そんなら二途かけてるのか』

『なアに。妹のおよしといふ方をさ』

『オッと合點した。善は急げじやが。今晩は都合がよくないから。明日早朝といふ事にしては』

『それは千万忝けねね何ぶん頼んだぜ。その代りそれが出來りやア身代限りをしても思ひきり御馳走するよ』

『よし〳〵出來してさん〳〵奢らさう。それを忘れて。折角貰ふても仲人をこまらすやうな。喧嘩なんざアすきいね』

『馬鹿おいゝでないよ。出來もしないうちから』

と他愛もなく興に入りて。夜はゝや時も過ぎたれば。

『じやア悉皆引受けた。大きに御馳走であつた』

と歸りかゝるに。猶も氣にかゝりて。

『オイ松ちやん妹のおよしの方だよ』

と眦目をおすに。

『よし〳〵。そのおよしさんを忘れずにうまく談し込むから。安心しねね』

（中）

次はよろづ仕立屋のこしらへ宜しく。下座なくて幕開く。中の間にすわり込んだるは。當家の親爺と親切者の松公。膝つきつけて烟管の音も威勢よく。

『それでは。わのなんですかいおよしを貰ッて下さるといふのですか妹はまだ當分宅においてもよいのじやが。姉の方は行戻りではあるし。もう二十歳の上も越した事じやから。ありやうは少々我慢しても。はしいと云ふ人があつたら與ららと思うて居りました。お前さんのお世話で。さういふ處へ嫁づきやア。こんな結構な事はございません。お前さんは失禮ながらまだお若いに。よくそのやうなお世話が出來まする。まこと感心しました。何分よろしう』

と大當り。松公はまたもや御意の變らぬうちにと。

『それでは私方こそどうぞよろしく』

と愛嬌こぼして歸り行く。

引返しは序幕の安公が住家。狹き家を日々拭き掃除。三寸角の大黑柱を黑く光らせながら。思ふたより產むが安いといふはこの事じや當分はあれを島田のまゝにしておいて。寄席へでもつれて行きやア荷身が廣くなるであらう。かうまア行くたア思はなんだ。以來から松ちやんといては罰が當る。松公大明神さまか。有難ていな。まてよ。かうなッて見ると彼女も少しは。この安さんに氣がわつたと見ゐるな。と自惚も手傳いて恐悅一方ならず。五尺の身体を持ちあぐみて。僅か十日の日足をもどかしがり。漸く今日といふ輿入れまで漕ぎつけぬ。今日は一世一代の大儀式と。安公いたくめかしこみて

日の暮るゝを待つ間はどなく。簞笥一竿に風呂敷包一個。續いて四臺の車は。仕立屋夫婦に。仲人の松公大明神と。思ひに思ひ。焦し焦し花嫁なり。やがて狹き居間に。いづれも珍らしく窮屈に居並びて。高砂やを心ばかりにすまし。三々九度の瀬戸際となりぬ。この時までは魂は何れにか飛びてありしが。漸く我にかへりて見れば今宵より偕老を契るべき相手は。思ひ焦れし妹にはあらで。思ひかけぬ姉娘なるに。安公いたく膽をつぶして。もはや盃をあぐる勇氣もなく。次の間に驅込みたるより。すは一大事こそ起りたれと。仲人に立ちし松公は大に狼狽し。

『これ安さん』。全体どうしたんだ。おれにさんゞ世話をやかして盃最中に逃げるなんて』

と小聲できめつくれば。安公はにがりきつて。

『違ッたゝ。だからおよしの方じやと念を押したのに。姉の方と間違へて。氣の毒じやが皆さんを歸してくんねえ』

と果はしよげかへるに。松公は漸く心付き。

『で分つた。お前もわるい。およしゝといふから。つい姉の方のおよしと間違へたのじや。妹はおつるで姉がおよしじや。困ッたなア』

と首をひねる有樣に。取のこされし嫁御前はきまりわるく。兩親も呆氣にとられて。何事の起りしかと。仲人を呼びたつる騷ぎに。松公身体これ谷まり。

『オイ安さん。間違うて見りやア厭でもあらうが。今更法がつかないから。今晩の處は穩便に盃を濟ましておくれ。後で姉妹の事だから。何うにか融通をつけるからヨ。さうしておくれ』

と機嫌をとりて元の座になほし。漸く四海波穏やかに治まりぬ。

三三、三四

（下）

安公は餘儀なき祝言をして。不愉快の中に其夜を明し。翌る日は今か〳〵と。松の字の訪ね來るを待ちくらし。其次の日も又の日も更に音汰沙のなきより。待ちあぐみて押掛んとせしが。たとひ二日なり三日なり。一つ竈の飯を食ひ。小皿つゝき合うて見れば。初め思うた程にもなく。縹緻もまんざらに非ず。さて憎む所もなきに。思ひかへして見れば。世渡る事にもなれ。よろづ愛想よく立廻るに。果は情愛が手傳ひ。なまじいなき若き世話のやける娘より。この方か結句堀出し物と。眞から底から可愛きものとなり。七日目には心入れの土産もちて。夫婦連れ立ちて里歸りせしに。里方の兩親は。案じた程にもなく。二人の仲睦じげなるを見て。ほく〳〵悦に入り

初めて聟殿の御座つたのなればとて。かづ〳〵の饗應に。何くれと話が湧き。里方にてはチラリと耳にせし輿入の夜の事もあれば。怪我のなきうちに。妹娘も何れへか片付けたしと。一つは心を引く爲に安公に持出せば。昨日までの安公なれば兎も角も。今は姉の方に心をよせてあれば。さまで修羅もたかず。フト思ひ付きたるは。親切者の松公。まだ一人身でもあり。働きもあり年も若し。成らば取持つてやりたしと。初一念の翻りて。

『義父さん。その妹の話ですが。どうか松ちやんに與つて貰いていものですが。さういふ譯には行かないかしら』

といふに拍子のよき時は萬事うまく行くものにて。

『お前さんが。よからうと思ふなら。よいやうにしておくんなさい』

と造作なく云はれて見れば。少しは未練の出ぬにもあらねど。無理

から我と我心を抑へて。

『それじやアどうぞさういふやうに』

と。其日はのどかに日の暮るゝを忘れぬ。

十三日の月を浴びて。安公我家に歸らんと。一町ばかり歩みを運ぶと。漸く七日目に出逢はした松公の驚き。横町へかはさんとするを見付けて。

『オイ兄貴一寸待ちねえ』

聲掛けられて見れば。さて逃げる事もならぬ。

『これはお揃ひで』

と。松公僅に口をきれば。

『然處に松ちやん。先夜は面倒をかけて濟まねえ。しかし見た通りだから安心してくんねえ。ところで今度は。私の方で仲人をしたいのがあるのじやが。此處は往來だから自宅まで來てもらえめえか』

『いぢめぬなら往かう』

『さうさ。こんどは取換たいにも一粒種だから』

『何でもよからう』

と二人は高話をしながら。引續きの舞臺にいで。また酒は始まる。

『松ちやん。その嫁といふは。外でもない女房の妹さ』

とまづ切り出したるに。

『安さん冗戯言つちやアいけねえ。そんなにいぢめぬ筈で來たのしやないか』

とよはき音を吐く。

『それが左樣でねえのじや。何にも言はねえで。私に任してくれぬ

か。さうすりやお前も己も親類になるじやねえか』

『何だか狐に化されて居るやうだよ。お前が始め言つた事を私が言ふやうな事になつて』

『何がよ』

『さア。貴はうといつたつて呉れるものか』

『それはお前の手際よりすこし旨いつもりだ。はや一方は話が出來てるのじやから』

『嘘を言ひねえ』

と。奥歯より洩るゝ恐悦顔。安心しすましたりと。

『萬事私に任しねえ。話の道行は斯うだから』

と。隔てぬ中どて事の始末を語るに。松公漸く腑に落ち。

『それは有難てえが。何だかお前に氣の毒なやうで』

越えて一月。仕立屋の妹娘丸髷となりぬ。或夜の寝物語に安公に嘘をさせし事もありき。

夏ごろも

蚊遣火

すゞしさ誘ふゆふ月の
影はひさしを洩れ乍ら
蚊遣たく火の煙りにて
あたりをぐらし庭の面

曉水鷄

寢亂れ髪のあかつきに
人や來ぬると驚ろきて
柴の戸ちかく立寄れば

かたぶく月に水鷄なく

納　涼

晝のあつさも暮行けば
すゞしき風もまし水の
あたりに月の影ふみて
今宵も夏をわすれけり

雪解松

（上）

上調子を入れた新内節の。横町を曲つたらしく。糸に風が觸つて音が冴えたと思ふと。何處へ呼び留められたのか。但しは呼び人のなさに撥の手を休めたのか。夜は〳〵や更けて淋しくなつた處へ。色氣

のない笛を吹きながら。按摩上下五百文と來た時は。不夜の里も實に寂寥として。宵のぞめきの跡方もなく。浮れ男の夢の中から。折々重ね草履の廊下を傳ふ音ばかり。誠に無造作千萬で。女房泣かしてまでの氣保養が。こんな中にあらうとは何うしても思はれない。夜風の肌につれなうてか。フト眼をさましたる若者。暫く四邊に目を呉れて。頻りに酒の息を吐いて居つたが。『ツイどろ〳〵眠て仕舞うた。夜は大さう更けたやうな』と。呟きながら起上つて。誰がこゝろざしぞ。枕元にある土瓶の水を。醉覺めの口にうつして。『アゝよい心持じや』と。軒越に空を仰ぐ。折ふしいざよひの月が雁の翅に掛つて。猶あまり夜に澄みわたつて居る。下界は淺草寺の八つの鐘が。他愛のない夢から夢へ響いて。其間を裏田甫の露に飽いてか。松むし鈴虫が時を得顔に歌うて。聞く人のないにも張合を拔かさぬ

やうである。

『この千金の夜の風情を。思はぬ所にて賞翫する事じや』と。若者は我を忘れて感に入る。そを心なくてか。歌舞の菩薩の唐突に『もうお目ざめでござんしたか』と。後より聲を掛けられて。折角の興味はさん〳〵に。若者は我身の居場所に氣が附いて。これはしたりと思ふと。流石にそれ者のそらさばこそ。『とうに來やうとは思ひましたが。ツイそこ此處のお客さまに。大抵やそッと世話のやけることでござんす。しかし是からはもう此方の世界。『さアでざんせ』と手を取る。若者は思はぬ待遇と。一度は驚いたが。さあらぬ顔で。『これは宵に見初た花魁。丁度よい處であつた。これから歸宅と思ふた處。して連れのお方は何うなされた』。寄つても附かぬ挨拶。相手は更に笑顔になつて。『ホヽそのお方なら。お先いお寢みなさんした。お歸りのなんのと。今更粋でもないやうに』『これはしたり煽動るも人に因る。お寢みとならば此儘無斷にて御免蒙る。お目ざめにならば。よろしく此由申して呉りやれ。さア案内を賴む』と。哺下りの衣紋を繕うて。はや歸り風の吹くを。『それはあんまりでござんすなんぼしがない女でも。まんざらお話相手にならぬでもござんせぬそれを宵に見た花魁かと。一口に見向きもさしやんせぬは。お情ないと申す者でござんす』『さう云はれては恐れ入る。さりとては此羊羹色を大切にして居る仕合せ。まア察してくりやれ』と。相槌も打兼ねさするに。『そのやうな事を云はんして。術なからすものでござんせぬ。お茶なと一つ飲し上つて。お身の上話しでも』『これはまた身の上話の何のと。武骨者の身の上。話して何の興があらう』。女はもはや多くは云はぬ。『まだそのやうに人じらしな』と。捕へし袖の放し

ばこそ。遂に若者も力及はず。

所は吉原京町の扇屋。花魁は三千歳とてなか〳〵の全盛。生れは三州の岡崎とかで。可なりな家に育つた娘ださうな。讀書一通りに糸竹の道。殊に琴には堪能であつて。春の宮が十八番とかで。其初めの句を源氏名に呼ぶ今の身になつた迄には。長い道行のあること。されど根が不身持で此廓に來たのではなく。それには哀れな物語があるさうである。されば應揚な處に優しみがあり。苦勞した甲斐には思ひやりもあつて。宮城野の臺詞ならねど。首尾やう年を勤めたいの一點張であるから。主人を初め朋輩にまで氣受よく。花魁の手本と褒むるも妙ならねど。三千歳さんを見習ふやうにせよとは。やり手のお熊の口からさへ出たさうである。されど此廓に全盛を唄はすほどの女。まんざら意氣地と張合のないでも無い。『始めて見にた

お客さんに。さぞ厚皮しいと思ひなさんしようが。此廓へ身を沈めて丁度四年。もう程なう年も明けます。お恥かしいがこれ迄には。分け隔てたお方はござんせぬ。どうしたものでござんすか。今宵に限つてあのそれが』と。出花に添ひて心の謎。若者も思はず打笑みて『エヽ何と云やる』

（中）

廓の中の百千鳥。又しても定の噂で。ツイうか〳〵と苦界の憂晴しよく言はれぬ人を果報者とは。よく穿つた詞である。三千歳さんのよい人とは。噂の數に入つた若者は。藝州岸戸の藩士であるが。如何なる事よりしてか。今ではこの江戸に浪人となつて。湯島の妻戀坂に小やかな家を構へ。讀書の師範をして。氣樂に其日の煙りを立てゝ居る。年の頃は二十七八で。目元の凛とした。鼻筋の通つた。

口元の締つた。その上に髪の黒さだけ顔の色が白うて。男には惜しい程と近所の娘達が取沙汰。いつの間にか業平の師匠と綽名を付けられ。大に男の相場を狂はして居るが。これとて身持の崩れも見ぬず。老婆を相手に男世帯も同然。顔の手入するでもなければ。着物は羊羹色の紋付。七つ屋から斷はられさうなのを。晝夜ともに着流しにして恥るでもなく。氣取るでもなく。若い者には珍らしいと。種々の方面から。信仰者はます〳〵多くなるやうである。

長山文之丞と標札の打つてあるを。通りかゝつて見付けたのは。文之丞が國元にての竹馬の友。增田三五郎。濱野作内の二人で。江戸は始めてなれば案内をとの事から。ツイ牛に牽かれて吉原へ繰込んだ。これが三千歳と初會の夜である。

文之丞には一つ思ひ出ださるゝ事がある。されど場所がらとて。し

かも男だてら白狀するでもなく。興に乘じて三千歳につられ。自然に笑顔になつて。可笑しと思ひし痴話も果は理に落ち。夜明烏に嫉まれて見れば。さて憎むべき所もなく。誘ふまゝに再度をもかへし二度より三度。次第々々に足近くなつて。豆腐の堅いのは當にならぬと。蔭口を利く人もあつた。

文之丞は氣味の悪い階子段も馴れ。三千歳の部屋へツカ〳〵と這入つて。誰を迷はせんとての身じまいか。いま白粉の最中を驚かして鏡臺の横に坐る『オアまア』と愛想よく。ソワ〳〵して居るのを。文之丞もたゞ打笑まるゝばかりである。かくて暫くは互に無言であつたが。文之丞は膝を乘出して。『然處に三千歳。今日は少し相談があつて參つたのじや』と半分云はせぬ『何でござんす。他人か何ぞのやうに。アノ改まつたお顔付』と。言葉の腰を折られて。文之丞は

ます〳〵眞面目。されどたちまち笑顔になつて『今日だけは改まらねばならぬといふのも仰山じやが。これまで大さうお前にも迷惑を懸けたが。いよ〳〵近い内に根引をする。異存があらば包まず云うてくりやれ』三千歳は夢のやうに。またその言葉に不信をおいた。それも無理ならぬ事で。文之丞が平素の扮装といひ。人傳に聞く境界といひ。兎も角も全盛の花魁を。身受せんとは思ひもよらぬことである『さうでござんすか。たとひお言葉だけでも』と。怪訝らしく思ふ素振の見ゆるに。『これはしたり三千歳。言葉だけでもとは不承知らしい。なぜ確かりと申してくれぬ』『あのそれは本當でござんすか』『これでも武士じや。何でいつはりを云はう。搔つまんで申せば斯うじや。昨日仔細あつて金子手に入り。朋友の勸めもあれば。遠からず妻帶せねばならぬ。先づさし當つてお前の身の上。異存がな

くは』と。氣休めらしからぬ云ひ振り。三千歳は思はず其手に縋つて『さう仰やるに嘘はござんすまい。それ聞いて落付きました。もとより取柄のないわたし。お目をかけてくださんすも。此廓に居ればこそ。と思うてばかり居りましたが。さう聞きまして嬉しうござんす實はわたしも此廓にはもう四五日。明日にも暇のとれる身体でござんすが。今度この扇屋へ抱へになる女がござんして。これにより勤の事を敎へてくれいと。樓主からの賴みでござんすゆゑ。こゝを出てから樂しみのあるでもないわたし。年の明くのを樂しんだ間は。どうした心でござんしたか。それについては〳〵思ふ旦那さま。ツイ斯うと云ひ出して御苦勞かけまするも。困つた事をと仰やるのを。お聞き申すのが目に見えて。お氣の毒でなりませぬから。隔てますではござんせぬが。つらい思ひを包みましたも。つり合は身の因果

でございます。それとても女の愚痴。斷念の付かうやうもございませぬ今日は思ひきつて云はうか。明日はまたと思ふた事は幾度かわかりませんなんだに。思ひもよらぬ今のお話。もし夢ではございませぬか』

『夢でもあらうか。どうぐいとしいものにして仕舞うた』

（二下）

今日を見納めとなれば。憂さに沈んだ部屋の中も。流石に名殘の惜まるゝが。三千歳は長煙管の掃除をしながら。『もう今日限り』と思はず獨言つのも。人情と云ふものであらう。其前に行儀よく坐つて居るのは。新たに抱へられた娘で。今を花の嫁入り盛り。縹緻なら擧動なら。何處と云うて點の打ち處もないが。何うしてまア此廓に賣られたか。それとともに假面をかぶつて居るのか。三千歳は我身の昔にくらべて。たゞ同情の感に堪えぬのである。漸く口を開いて。

『どうした御縁で此樓へでざんしたか。親方さんからのお賴み故。ツイ一通りのお話し。いやでもあらうが聞いて下さんせ。いやもう此廓へ來る程の人に。涙の種でないのはでざんせぬ。先づ第一にそれを忘れねば。一日も勤まるものではでざんせぬから。平素心を廣うもつて。我身さへ馬鹿にして居れば樂なもの。そして苦界と云ふことは。厭なお客にも笑ふて勤めるといふより外はでざんせぬ。此廓でも雨の降るのを風がとも。風が吹くのを雨がとも云ひませぬが嘘を言はせるのがお客の慰み。とても嘘なら誠にならぬやうに。不實なやうなが多くの相手にこちらは一人でざんす』言ひかけて煙草一服。娘は初心のたゞ俯向いたまゝ。『いろ〳〵有難うございます』と。通り一遍の挨拶。涙ぐむさまのいぢらしさに。三千歳は言ひ紛らさんと。『そしてまだ名も知りませぬが。何と云ふお名でざんす

相手は優しう云はれて。『ハイお雪と申します』と。また袖に顔を掩ふ『それはよい名でござんすが。今日限りにわたしは此樓を出る躰。外の人に聞かせるでもござんせぬから。かうして此樓へ來なんした譯を。お排ひなくば聞かして下さんせ』お雪はせめて優しいと頼みに思ふた人が。今日を限りと聞いて。此上はまたどのやうな人に使はれて。憂目を見ることぞと猶悲しく。すこしの間なと憂きを語つて。半分なりと泣いて貰はんと。『ようおやさしう云ふて下さいますお耻かしいが身の成行き。どうぞお聞き下さいませ。私の生れは中國筋で。藝州岸戸の者でございますが。耻を申さねば分りませぬ。わたしが十六の春。鎮守のお祭りに參詣をしました歸り途。醉どれに待伏せられて。言ふこと聞けの何のと。既に危ひ所をお助け下さつたは御藩中で長山樣と仰やる御指南番の御二男。文之丞と仰やるお方でございますが。それが御縁のはしとなつて』と。事の意外に三千歳は驚いて。思はず『エヽ』と聲をたてる。お雪は何の氣も付かねは『どうかなさいましたか』三千歳はやうやく胸をしづめて。『ツイ癪で』と言紛らし。『もうおさまりました。それからどうなさんした』お雪は話の調子を崩して。また云ひ出さんも厚皮しと。其まゝ外へ話を移さんとしたを。三千歳に強いられて。『それからの文之丞と人目を忍ぶ中となりましたが。度重なりましては隠すより現はれてこの事いつとはなく御藩中の評判となり。御いとしや文之丞樣は御勘當となり。お國をお出立なされたと。後で聞きました私の切なさまた我家の手前も面目なさに。何處と目的もなく御跡を慕うて。大阪までは參りましたが。路銀の盡きに悲しさに。馴れぬ宿屋の水仕奉公。數多出入りのある中に。もしや其方の便りもと。そればかり

を樂しんで居りまするうちに。二年あまりも仇に過し。とてもお目にかゝれる事はと。頼みの綱も切れましたが。さき頃江戸にでざるとの噂を。風の便りに聞きまして。女の念力で逢はれぬ事もと。盲さがしにお江戸に參りまする途中。二川の驛で道づれになりました女中に。つい奥底もなく身の上話しをしますと。その女の亭主と申すのが惡者で。その方ならば聞いた事のある方。受合うてお逢はせ申さうと。その時は工んだ事とも知りませんから。云ふまゝに世話になつて居りますると。江戸へ着いて間もなく。それを恩に着せて金の才覺。どうぞ身を賣つてくれいと。藪から棒の難題。厭とも云はさぬ籠の鳥。とう〳〵淺ましい事になりました』三千歳は事のあらましを聞いて。さては文之丞樣の初めの素振。斯うした譯のある事かと。嫉ましうなるも女の常であらう。『さうでござんしたか』と始めの勢ひは何れへか行つて仕舞ふ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊

越して四日長山文之丞は華燭の典を擧げた。三々九度の盃。今更の思ひして漸く式を終へ。花嫁の綿帽子を取れば。文之丞の驚いたも無理か。思ひもよらぬ三千歳である。花嫁は堪へかねて『お久し振で』と。跡は言葉もなくて。懷より取りたる懷紙。手跡も見事に。

たのしみて指折りし日も。仇な契りに仇となりて。猶も浮世にさとられぬ悟りを開き候。これより後の我身には。これまでの我心すこしもやどらず。たゞこれまでの我まことをのみ。いま御もと樣にまゐらす。このちはこの恐ろしき罪をつくり出たまはぬやう。かく申すを未練と思召されんもはづかし。

何事も夢の浮世の夢なりと

思ひすごせばやすけからまし　五七

吉原にいまつきだしの

傾城　みちとせ

と記してある。一座は春秋一度に來れるが如き有樣であつた。三千歳が熱き涙に。お雪の節操は全くして。扇屋はます〳〵繁昌した。

秋初風

山

わが手すさびの妻琴に
通ひし山のまつかせは
たゞ一よさの夢の間に
秋のしらべに成にけり

川

川霧わけて行くふねに
吹來る風のすしゞさは
昨日にけふは變らねど
蘆のそよぎに秋ぞ見ゆ

野

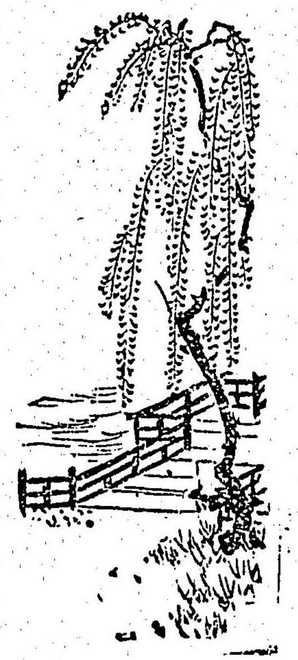
野邊の夕暮來て見れば
空をかすめて二つ三つ
飛ぶや蜻蛉の羽袖にも
涼しさかよふ秋のかぜ

里

庭に落葉をしらねども

いつしか秋は來に鳬し
袂に馴れしかせさへも
けさは一入身にぞしむ

天王橋



（上）

チン。チン。

『ナンダ。今二時が鳴つて居る。馬鹿に今夜は寒い晩だ。ソウ遠慮なく吹かれてはたまつたものじやない。

と。罪もない風にぶつ〳〵小言ながら。並木通りをノコ〳〵やつて

來る手代風の男。吉原から冷遇れて歸る者とも見えず。前垂掛の二一添作な風俗が却て問題者である。折ふし腹が北山でわつたか。わたりのおでんに鼻を奪られて。思ひ出したやうな顔をして臺の所へ立寄ると。芋。蒟蒻。半平。雁もどき。乃至竹輪の連中が威勢よく。しらくら仁左衛門の中で氣焔を吐いて居る。

『オイ。一本燗ておくんな。

と聲をかけて。霧間を分けてと云ふも仰山なが。湯氣越に張番の婆アさんを見れば是は驚いた

『おばさんじやないか。

婆アさんは三下りの眼をつり上げて。

『オヤ清さん。これはお珍らしいこと。そして今時分何處からお歸り。今晩はさつい寒さじやございませんか。まア此方でおあぶり

なさいませ。

若者はグット一杯引ッかける筈の調子が抜けて。

『じやア火の側へゆかうか。

さて婆アさんと火鉢を關にさし向きになつたが。これは新聞の種にもならない。

『どうです。お店は御繁昌ですか。

『ハ、、、。ドウモ蟻小なお店で……。隨分此處はお客があるでせう。

『お蔭さまでボツ〳〵ございますが。もう年が老て徹夜の寒晒しは困ります。鹿の奴が放蕩でございますから。ドウせ一生樂は出來ません。清さんの樣な子を持つた親御は。どんなに御幸福かしれません。

實に涙の相塲は老人ほど廉價いものはない。若者は妙邊い處でお褒に預り。

『有がたう。何を散財りましよ。

『イヤ冗談じやでございませぬ。

『カラサ。散財ると云ふんです。

『若い人はこれじやから。何うも氣の早いこと。老人は迂ッかり物が云へませぬ。

婆アさんは一口弄言れて。袂で顏に一刷毛やつゝくれば。はや涙は何れへか轉居して。春の雪を見るやうに。降ると思ふ間に止まつて居る。

『却説に鹿さんといへば。主家の若旦那にも困りますよ。

『矢ッ張り新橋へお流連でございますか。

『お流連の間は結構ですが。旦那さんはアンナ餓鬼奴がと大束ですが。内室さんは晝夜氣を揉んで夜も碌々寢ないやうす。それを思ふと親ほど勿体ないものはない。ところが。去年の夏家出したばかりで。皆暮行衛が知れなんだのが。けふ天王橋で見掛けた人があるといふので。何が何んでも捜し出して呉れと。迷兒探しも何さま寒うて。

（下）

骨でも喰ひ忘れたか。瘦犬がワン〳〵吠たてゝ。こはり付いた黒土に地響をさせて居る。之に合奏をうつものは。癇ばしつた車の音と鍋焼うどんの夜なき聲である。大路の柳に逗留して居る月も。さぞ淋しからうと思ひやらるゝ。

夜もはやお暇乞となりかゝつて。婆さんの店は得意になる何處に人影の見えるでもなさに。お田樂燗酒のお客は。いつも二三人位新陳代謝つて居る。若者は氣永くも腰を据えて。偶には客から勘定を問はるゝ時もある。こゝ氣の利かぬことおびたゞしいもので。横合から婆さんが。

『へイ〳〵。雁もどきが二錢で。お芋が一錢。上酒が三錢。さうでございます。お芋は一個でございました子ー。さうすると七錢になります。

この時の顔は。妾が主人といふ風を見せて居る。漸く一しきり客をかへして。チヤラ〳〵小皿を洗ひはじめる。

『中々お客がありますネー。

『イヤもう忙しいばかりでございます。

『然處に大さう長居をしました。一遍から覺えておいたら。またち

よこ〳〵お邪魔に來ますよ。

若者は立ちかゝらうとする時。いつの間に來たか。またお客がある

チラツク曉の火影に晒した姿は此店へ來るものとしてもめでたからぬ方である。垢で染まつた山道の手拭を頰かぶつて。顏の拵へ方は分らねど。天窓の破れ目から髪が喰ひ出した處。公園面でなくばおさまりが付かず。紺飛白の單と双子縞の袷と重ね着。繼の多いことは東海道もたゞならず。而も美事なツンツルテンである。それに三尺も覺束ない煮染色のを締め。茶筌流になつたシヤツの手首から。虱が出稼ぎをしさうである。試に此身躰を屑屋に踏ましたらばいかに。男一貫はおろか。五十文にも手を付けぬ程である。件の男は若者に身代の相場入れらるゝとも知らぬ。目を注いだは例の沸かへつた鍋の中である。

「これをとるぞい。

と云ひながら。贅澤にも竹輪を弓手にからめ。ムシヤ〳〵食ひかゝる。

若者は婆アさんの袖をひいて。錢がなさゝうな客ではないかと云ふ目顏を見せる。

「ナニ大方これでございます。

と。婆アさん小聲で返辭しながら。更に頓着しても居らぬ樣子。

「實におばアさんは大膽なものじや。

と。若者は腹の中で感服をして居る。

「酒も一ばいおくれ。

と。また横柄な鼻聲で注文する。

「へイ〳〵。

婆アさんは掃はずさし出す。若者はいよ〳〵驚いた。見すぼらしき男は。親の仇敵にでも邂逅うたつもりで。見掛不相應に腹を肥して居る。

『何程になるか。

婆アさんは腮で勘定をしながら。

『十五錢になります。

男は懐から手を出して。

『こゝへ置いてゆくよ。

と。臺の上に音をさせて。其のまゝ雲を霞であつた。婆アさんは手を伸して金を取らうとすると。若者の驚いたも無理か。石ころが二ツ行儀よく並んで居る。流石の婆アさんも半句もなかつた。

『この年老に胡麻を摺るッちや。實にひどい奴じや。ヒツつかまい

て派出所へ渡してやらう。其代りお錢は私が拂うてあげる。

若者は二十錢の銀貨を惜氣もなくはうり出し。喰逃げした男の跡を追うた。天王橋を左へ枉つた所で。男は意氣地なくも若者にふんづかまれ。組しかれた態は丸で形なしである。若者はさん〴〵拳突を喰はし。二十錢の仇讎はたしかに討つた。やがて面目なげに起き上がる男の顔を見て。また〳〵驚いた。

『オヤあなたは若旦那さま。

斷琴

雪

降る白雪を笑ましげに
袂に受けておくりてし
人のこゝろの優しさを

解きしぞいまの涙なる　十〇

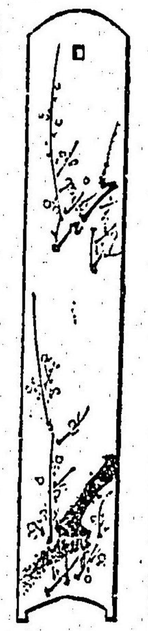
月

心かたりて夜もすがら
笑顔ならべし嬉しさを
照らし〻月の今はしも
かはるは人と笑はなん

花

風に追れて散るはなの
春ながれ行く水のおも
めでしきのふの姿こそ
いまのかなしき心なれ

春芝居



四畳半の小坐敷に。醉顔を燈影にちらつかせながら。お氣に入りの名見崎友太夫を相手に。いたく興に入りたまふ大阪屋の若旦那。今宵は圖らぜ太夫が來てくれたので。よい年忘れをした。何か今一曲をと云ふ所なれど。太夫は隨分諸方を飛び歩く人だから。變つた珍らしい話があるであらう。身の上ばなしといふのでも宜いから聞きたいね。と古風な仰せ。何といたしまして身の上ばなしなんぞと。そのやうな氣の利いた話は藥にもございません。が折角の仰せにござりますれば。私が大困難をした時のお話を。一席うかゞひませう。私も元は本町通で。可なりな呉服店を持つて居りましたが。どうく藝が家藏を喰潰して。名見崎友太夫と浮み上つてから。世の中がま

す〳〵茶になつて。どうも面白くてたまらぬ。俳優を前に踊らして野馬臺で語る時なんざア。自分が保養をしながら。他様にやい〳〵云はれて。こんな面白い事はないものを。何で親爺が八釜しういふのであらう。何も孝行じや。一つ此喉を聞かせたいなと。萬夢中でございましたが。貧乏しては藝人ほど意氣地のないものはございません。忘れもしませぬ。一昨年の暮の事でございました。其年は病氣と時化で。運はるく芝居はゝづれ。お坐敷はかゝらぬ。所在がなさに碌な事は覺えぬ。それで大晦日まで溜付けましたが。その大晦日が一芝居で。貧乏人の一德には。貸してくれるものがありませんから。借金といふものは一文もございませんが。元日を目の前に控えて。春着などの贅澤はさてお入き。凡そ物になりさうな品は。悉く七ツ屋の紙捻にかゝり。臺所に釜のあるはまだしもでございました

が。さて炊く米もございませぬば。拍子の惡い時は仕方のないもので。薪はもう疾うに焚して仕まひ。醬油に石油まで種切といふ始末懷中には虎の子のやうに大切にした一圓紙幣一枚。これも自分のなら心强うございますが。大切な客人から仲間の豐花と申すのへ附屆の金を序があるといふので預つて居るのでございますから。我慢にも手はつけられません。そこで女房はやきもきする。子供はせかむ。もう日が暮れて御馳走の目的があるのでもない。たゞ腹ばかりすかして。青息吐息を洩らして居るばかり。二進も三進もなりませぬから。何うしたら宜からうと途方にくれましたが。かうして家に居たからとて誰も門口から金をほうり込んで行くものもあるまい。自分一人はどうなつてもよいが。子供が可哀さうでなりませんから。せめては其一圓の紙幣を。豐花の家へ屆けて。改めて借る事にせう。

世が世なら一圓位の紙幣。隨分鼻かんでも惜くはあるまいになさけない事とは思ひましたが。どうも脊に腹はかへられぬ外によい序がありながら。千束町からテク〳〵本郷まで出掛けるつらさ。やう〳〵元氣を出して切通しまで來ますと。腹はます〳〵へるし。もう一足も歩く空がございません。すると思ひ出したのは。私の友達で仲と申すのが。その春切通しへ移轉して幸ひ番地も覺へて居ましたから逢つて見たら面白い話でもあらうかと思うて。尋ねて見ますと造作なく知れたのはようございましたが。仲の家では年越の花合戰最中根が嫌ひでもありませんから。一勝負見て居りますると。相手は急に手のあきさうでもございませんから。惡い所へ來會してと。又來るからとよい加減の事をいふて。其處を出やうとしますと。相手は私の懷中も知らず。一つ仲間入をして行くがいゝやと。無理にすゝ

めるものでございますから。此時までは正直正路の友太夫でございましたが。惡い所で魔がさし。他樣の金なれど懷中の一圓。運と天に任して拜借をしよう。萬が一勝でもすれば。今宵の米の代にもなる事と。急に自棄半分の太ッ腹になつて。とう〳〵其仲間に入りましたが。不思議に手が附く札は起る。初めから換貫の五つばかりも入れさして。思ひがけなき大勝利。見る間に四五圓商法しましたから。よい加減に切り上げりやアよいものを。入らぬ義理立して。其中を少し減した所で。左樣ならを極めやうとしましたが。兎角するうちお場錢の義理として。きた山の腹に天どんが來る。懷は暖し忽ち春着の一枚も稼ぐ氣になり。用心に用心を重ねて。漸く我懷に入つた金を。猶二倍にも三倍にもしてと慾に目がくらみ。勝に乘じて無闇に出をかけたものですから。いつまでも旨くは問屋が卸し

てくれず。見切時を外したばかりで。やがて初めの勢は何處へやら、次第々々に元の杢阿彌になりかゝりましたから。躍起になつて引くほどにめくる程に。果は少々脚を出す始末ですから。今一度もり返したいにもさうはなりませぬ。人から預かりの虎の子までさらはれて。其場を出ました時は。夜もはや十二時を過ぎまして。何に吠えるのか痩犬が消魂しき聲を出しましたが。もう石を投げる力もありません。

《下》

上野の鐘が百八煩惱に響いて。など申しますと生意氣でございますが。もう一足々々で正月に近づきますに。心がらとはいへ。私はかりは冥途へでも引張り込まるゝ心持がしまして。先へも行けず。さりとて我家ながら今更かへるも面目なし。どうしたものであらうと

同じ道を幾度となく行きかへり致しましたが。さて何うにもかうにも法がつきませんから。寧そ死んでしまうたら。こんな苦しい思ひをするにも及ぶまいと。不忍の池の端へ出ましたが。折ふし柳の糸の戰ぎも止まつて。何となく死ぬ張合もございません。これではならぬと勇氣を出して。三尺帶を解きましたが。夜風がヒーヤリと身体に染みわたりますので。まだ婆婆に心が殘り。今頃は斯ういふ事とも知らず。嘸子供等が寐ぢに待て居るであらうと。ツマラヌ思惟が出ますと。もう〳〵たまらなくなりまして。せめて正月三ケ日の餅代なりと。置土産に拵へてやつて。喜ぶ顔を見た上にしても。遲いといふではなしと。思案をすつかりしかへまして。はてどうしたら宜からうと。色々と考へて見ましたが。貧すれば鈍をしてよい智惠も出ません。此上は面目なけれど。仲間の花戸太夫といふは信切

な男でございますから。それを訪ねて相談の相手になつて貰はうと清島町の宅へ行きました處。花戸太夫は大機嫌で。友さんかよい處へ來てくれた。そしてもう夜が明けるに間もないがどうして今頃來なさつたか。それとも鳴戸太夫に逢うて來なさつたかと。藪から棒の尋ねでございますから。イヽエ鳴戸太夫には暫く逢ひませぬが。何ぞ用でもあるやうに云ふて居りましたか。と聞いて見ますと。それでは何の用で來なさつたか知らないが。何でも鳴戸さんが。急に田舍の春芝居の事で。お前さんに是非逢ひたいと云ふので。お前さんの宅へ行く〳〵宵に出たきり歸らないといふから。殘念じやけれども今晩の間には合ふまい。誰かよい人があれば世話してくれぬかとの頼み。なか〳〵元日匆々田舍へ行かうなんといふ。今時そんな辛棒人はありませんから。とても駄目だからと一時間ばかり前。斷つて歸したが。もし都合がつくなら。早いつてまとめてやつてくれぬかと云ひますから。鳴戸太夫に逢へば又旨い話がわらうも知れずと。挨拶もそこ〳〵に鳴戸太夫の家へ馳付けますと。鳴戸太夫は大喜びで。田舍芝居の事でわらい心配をして居つたが。まア〳〵よい所へ來てくれた。ときに餘儀なく仕負込んだ田舍芝居じやが。一つ助けて貰ふ譯には行くまいか。と時にとつて結構な相談に。死ぬ事なぞは綺麗に忘れ。實はいま花戸太夫から聞て來たのじやが。給金さへ相當になる事なら。そりや行つてもよからう。それじや十日で十五圓。歳末の事故悉皆先拂ひをしようと。ズラリと並べられた時には。有難涙が出るほどでございましたが。そこへ來ると妙なもので。それじやアチト酷いじやないか。もう五圓も出してもらひたいと。一駄々こねて見ると。相手は内兜の見ぬかして。そればじやア

それッばかしの事どうでもするから。しかし今はすつかり金を出して仕舞うた跡じやから。明日になつたらなんとかして出先へ送らうそれで。朝の所は我慢して出掛けておくれ。よろしい心得たと受負うて。直ぐに我家に歸りますと。思ふた程でもなく。女房は何處からでか才覺して。どうか斯うか其晩の凌ぎをつけて。子供等も餘念もなげに寢て居りますから。すつての事に違ふ國へ行く處であつたと。身顫ひの出るのもゝつとも。十二時過ぎて身体を寒晒しにしたものでございますから。どうも寒くてなりません。火の子もないじやないか。早う火をおこしてくれと女房に云ひますと。女房も少々立腹の体で。今時分まで何處へごろついて居たんですよ。火をおこせたつて。薪や炭が何處にあります。わたしや宵からどんなに心配したか知れませんよ。オーそれ〳〵十二時頃鳴戸さんが。何か急に

お前さんに咄があるからとて來ましたが。よもやまだ逢はないだらうねゑ。よし〳〵それも逢つて用が辨じた。何にしても寒いから火を拵へておくれ。新代がいるなら一圓もあればよいだらう。どん〳〵火をお拵へと。一景氣つけますとコケコーッと一番鷄が。元日を觸れて鳴きだしました。とう〳〵元日になつたか。どうも宜い正月じやと。大しよげにしかへつた女房に。懐の十五圓を並べて見せてさアこれを正月の小遣におしなさいひますと。立腹して居つた女房が果は泣き出しました。これが嬉し泣きとでもいふのでございませうそれから夜が明け離れる。思ひも初めぬ雑煮にもありついて。親の心を知らない子供等は。一向平氣なもので。おッ母さん。いつの間に餅を搗いたのと。いぢらしい位なものでございました。

それから高崎で芝居をうち。續いて二三ヶ所興行をして廻はりまし

たが。仕合せなことには何れも大あたりで。少しづゝ景氣をとりかへし。其内若旦那にも御贔負になりまして。斯うして出られますのも有難いことで。一昨年の今頃に引かへて。出掛には女房が何か正月の拵へをして居りました。イヤ人の一生ぐらゐ種々にかはるものはございません。

朝顔日記

宇　治

宇治の川水かきならす
琴のしらべに通ひ來る
風に吹まく小簾の外を
見送る空や飛ぶはたる

明　石

月も明石のあけがたに
笛の音すみて聞ゆなり
ゆかしと耳を洗ふ間も
なみにつれなしあさ嵐

耶　摩

小鳥の聲も耶摩かろし
はだゑに徹る冬のくれ
焚火に消ゆる雪間より
洩るゝ香たかし梅の花

濱　松

浪にさゝやく濱まつの
木蔭にしばし立寄れば

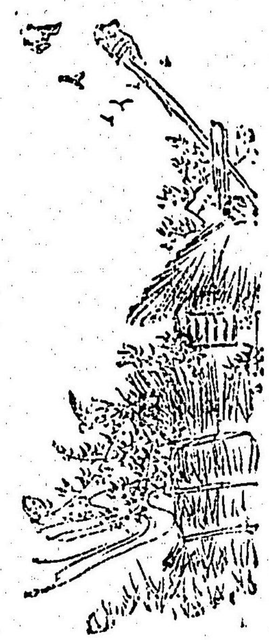
思ひ掛なくはとゝぎす
　聲も哀れに名のるなり

島田

露にやどれる月かげを
　知ずて獨りきりゝす
芝の葉うちに淋しけに
　おのれの秋を歌ふなり

田家の煙

（上）



物事の後るゝ里に似もやらぬ。まだうら寒き春風に。軒の白梅香ふ

迄り。谷の戸いづるうぐひすの。鄙にもてゑのめづらしく。唄へる節のやさしさに。霞まぬ空も長閑なり。

霜ふみ消して畔道づたひ。鍬にうき身のやつれも慰はず。行くはたしかに與三さんと。あたり憚り呼び止むるを。素知らぬ顔の頬かむり。それはあまりにすげないと。走り絶つて袖ひけば。これはゝお春さん。この寒いのに何處へ行かしやる。何處へも行きはしませぬが。そなたがチラリと見初た故。ツイ足曳のやまゝに。話した い事もあり。智恵の借りたい事もあつて。此處まで跡を追ひました畠の土もまだ凍て。鍬も入れにくでざんせう。永うは手間はとらせませぬ。あの松の木の下陰で。少し憩んで下さんせ。そゝやお春さんの何をいはしやる。話しの智恵のと冗戯ばかり。畠の麥が待つて居やうに。早う草でもとつてやろ。ゆるゝでざれといひすてゝ。

ふり切る袖にとりすがり。何のそなたに冗談いはう。まア聞て見て下さんせ。そんなら話といはしやるは。アノ與三さんの改まつて。何のさうではなけれども。もし意地わるに見られたら。根もなき幹に葉を添へて。いつかのやうなそしり草。はやさせるのが氣の毒ゆゑ。ツイ一口で済むことなら。人の來ぬうち聞きませう。女はわたり見まはして。さういはしやんすりやいつかのこと。まだ覺えて居さんせう。成らう事なら其時の。浮名が長う立てたいに。それにつけても世の中は。かうまゝならぬものかいな。男もさすがにくからぬ。思ひを無理におしゝづめ。滅多な事をいはしやるな。何處に耳があらうも知れぬ。昨日隣りの話では。めでたい事のある樣子。指でも折つて待たしやれや。それはあんまりすげない云ひやう。それをわたしが得心なら。このやうにはいひませぬ。どうぞ口數きかせ

ぜと。分別をして下さんせ。これはしたりお春さん。男前なら學問なら。何處に一つの不足はさ。坂の下の先生樣。よい御亭主を持つことゝ。隣近所の娘達。すこしはあやかりたいものと。羨んで居る中に。否の應のと云はれては。罰でも當りませうぞい。アノ與三さんのおだてること。少しも嬉しうござんせぬ。わたしの心を知りもせず。それそのやうにいはしやんすは。お染さんといふ美しい。お方ばかりがいとしうて。人は泣かうが倒れよが。少しも攝ひはなさらぬか。それはまた變つた事を。何でそんなに思ひませう。雨もる家に起臥して。つゞれに何處と見る影も。渚離し捨小舟。先生樣にどうしてまア。及びもつくことではない。そりや與三さんの買被う。世間の人は兎も角も。母さまゝでが先生と。勿体らしう云うてじやけれど。どれ程藝が出來てか知らぬ。器量自慢の憎らしさ。鳥

なき里の蝙蝠を。どうも直がすきませぬ。すかぬ人には思はれて。思ひに思ふ人からは。それは〳〵つれない仕打。いひつゝうるむ眼に涙。男は髪も撫でたかを。さすがに我身はぢらひて。暫し言葉もなかりしが。やう〳〵心はげまして。嘘にもせよ忘れもせぬ去年の夏。田植に暮れて戻り道。怪我した足の血しほをば。通りかゝつたお前様が。風呂敷裂いて惜氣もなう。傷口巻いて下さつた。其嬉しさが仇となり。あられぬ事を世間の口。戸がたてられぬも相手がわたし。釣合ぬ過ぎたが仕合せ。女は跡をもぎとつて。いまさら釣合ふの釣合はぬのと。その時のわたしには。戀といふ字も知らぬけれど。そなたが當から親孝行。それを小耳に狭んだ故。ツイ譯もなく頼もしく。物さへ言ふた事のない。そなたに迷惑かけるとも情だてした浮名から。顔見る度にいとしうなり。笑はれるのを心得て。女だてらに打つけて。恥かしいことといふ胸の中少しは察。して下さんせ。それは我身に餘ること。勿体ないはどなれど。既に極つた縁談の。相手は評判の先生様。よしやそれでないにしても。其日ぐらしと田地持。倒まならで叶はぬと。お前様は掛替のない一人娘わたしとて親持なれば。こりやどこまでも先生様を。又しても與三さんの。そのやうな事云はしやんす。それではやつぱりお染さまにさうではなけれど。そんならどうぞ思案して。これはわたしにも思案にあまつて。オヤいつの間にか日が昇つた。もう十時にもなりませう。こゝでの長話しは。誰か見ようも知れぬから。其うち折を見合して。そんなら與三さん。よう考へておいて下さんせ。よろしうござると會釋して。さす手の方へ別れ行く。お春は跡を見送りて。はろりと袖に一雫。しばしは其處を去りも得やらず。

（中）

軒は傾き壁は落ち。月洩る宿も住みなれて。見れば氣安き世の中や細き煙りのたつまさへ。其日れくりの野ばたらき。今日もはしなく暮れ六つの。鐘を相圖に歸り來る。内には母の待ちかねて。オヽ戻りやつたか。今日は定めて冷たであらう。湯もちやんと沸してある早うくつろいたがよかちうと。盥にあつき親心。どうも有難うございます。寒いといふてもヽう春。この若いみそらでなんの〳〵。それよりお母の風邪は。もうさつぱりとしましたか。どうやらお顔色はよくなつたやうじやが。まア大事になされやと。よごれし夜類脱ぎかへて。夕餐の膳もこゝろよく。これで自分の身体になつた。お母肩でも揉みませうと。壹の疲れを目にも見せぬ。撫でつ擦りついたはるに。ヲヽ今宵は肩もこりませぬ。横になつて休んだがよい。

ときに與三。お前に少し話がある。それは外の事でもない。がお前もゝうよい年になつたれは。いつまでも一人では居られまい。それにお荷物のわたしといふものもあり。早う孫の顔もみたいから。お嫁をもらうてはくれまいか。というて五六年前とは違うて。死なれた父さんに。身代を棒にふられ。殘つたのは借錢ばかり。ツイそれと嫁てくれるものもなかちうが。お染坊なら互に氣でゝろも知つて居るし。貧しい中に辛抱も出來やう。早うさうする氣はないか。それはお母の何事かと思へば。この與三に嫁のなんのと。男の手一つで水仕の手助けも出來ず。嘸お母の世話もやけませうが。いま暫くすれば何とかしませうに。どうぞ少しの間現在のまゝで。それではならぬといやるか。なんのなるならぬと。さういふ譯ではなけれどなければ。ならばさうしておくれ。それはあんまり急な事で。急とい

ふて昨日今日の話ではない。お染坊とは幼いからの許嫁。それにとやかう云やるのは。おまへ北見屋の春さんに。何ぞ約束でもした覺はないか。さてはかくせどあの時の。思ひもようぬ立話。早くも人に見られしかと。さわ〳〵心をおしつゝみ。なんしに與三がそのやうな。よその娘に約束など。そりや人違ひでございませう。それ聞て落付ました。それも若い者の事じやから。咎めだてするでもないが。もしさういふ事であつた日には。釣合ひのとれぬはよいとしても。あちらも一人娘ゆゑ。くれも出來ねば貰ひもならぬ。もし不了見でも出されたら。いやさうでないのに心配するでもあるまい。とかく年がよつては愚痴が出てと。跡は笑ひにまぎらして。暫し言葉もとだえたる。後の間に二人の影。女は男の顔さしのぞき。こゝまで來いといはんす故。まゐつては見ましたが。もうわたしには用のない筈。これはお染さんの愛想づかし。今更用があるのないのと外に見かへす人でも出來たか。油斷も隙もなる事か。そりやわたしから云ひたいこと。いつか鎭守のお祭に。さはる袂の縁むすび。未は女房にしてやろと。それは〳〵嬉しい約束。いつ其時の來ることぞと。夜毎の夢もそればかり。いまのいまゝで樂んで。指折るやうに思ふたに。いつの間にやらわたしを捨て。これ見よがしに北見屋へ。行かしやすとの取沙汰は。まんざら嘘でもございますまい。それをわたしが知るまいと。いまもいまとて顚倒な。お嬲りなさるも程がある。思切つたつれない仕方。何ぼう足らはぬわたしへでも。それでは義理がたちますか。これほどまでに捨てられて。やつぱり心殘りなは。どうしたことでございませうと。男の膝に取りすがる。なんしにそなたを捨てようぞ。それほどならば呼出して。いやな思ひを

するものぞ。それには少し譯のあること。まア涙でも拭いたがよいかりにも人に先生ど。たてられる身を以て。與三さんといふ許嫁のあるのを知つて不始末を。働らくうへは何處までも。末の契りをむすぶ筈。あの北見屋の話といふも。女の親にのぞまれて。以前は世話にもなつたれば。さうすげなくも斷はれぞ。それにそなたと世間の手前。とても添ふなら此在所を。捨てゝ他國へ行かねばならぞ。さしあたつての身の落付き。今日は明日はと思ふうち。思ひもよらぬ取沙汰に。飛んだ思ひをさせました。そしてそなたはさうしてもよもや異存はありやすまい。それはまことでござんすか。さういふことゝは知らぬ故。人の噂を聞いたとき。あるに甲斐なき思ふたに折角馴染んだ此土地を。見すてゝまでもわたくしを。連れてやらうとおやさしい。其おこゝろはいつまでも。胸に仕舞うて忘れませぬ

最前怨みを云ふたのも。女の智恵の足らぬ故。どうぞゆるして下さんせ。はやうれしげに打笑むを。男は指でなぶりつゝ。それでは許嫁の與三さんは。またそのやうに困らせて。いまになつては許嫁も。いはぬなづけもわつたものでござんせぬ。折ふし月に雲間に入り。心の闇に道くらし。

（下）

戀てふものゝ世の中に。絶えてしなくば中々に。言葉の花も匂はざるらん。オイ松藏。お染坊の話を聞いたか。そりやア耳よりじや。變つた話でもあるかよ。それなら手前知らないか。よく物をつもつても見なさい。手前も妙な眼付をした。不器量な仲間じやないか。ナニ話といふは棚卸しか。まだ仕事の殘りもあるに。よい加減にしてもらいたいよ。そりやアよせといふならよしもしようが。手前が

可愛さうでならぬから。さういやアこのあいだお染坊が。村の先生と駈落をしたといふ事じやが。やつはり嘘ではないかしらん。それじやからおめでたいといふ事よ。駈落ぐらゐの沙汰なれば。何で面倒な冐頭を云はうぞ。まア緩りと聞たがよい。旅の人には手を置くなと。昔からもいふ事じやが。あの柔和さうな顔した先生がよ。與三さんといふ孝行息子の。許嫁といふを承知しながら。手前と同じやうに眼を付けたが。細工が上手なだけに。札はあちらへ落ちて仕舞うた。ところが先頃になつて。北見屋の後家どのが見込を付けて見非先生を聟にしたいと言出したを。誰も苦情の云ひ人がなくて。さうと話が初まると。何が先生は慾得づくで。それよからうと二つ返事よ。それでも本尊のお春さんは。お染ぼうより眼が高いかして頭を横にふつたので。そのまゝ沙汰やみといふ事になると。われか

ら斷りでもしたやうに。それを鼻にかけてお染坊を連出し。都路さしてまではよかつたが。ヤレ〳〵嬉しや。これから天下晴れての夫婦ぞと。樂みにした甲斐もなく。可愛さうにお染坊は。とう〳〵因果を含められて。吉原とやらの女郎に賣られ。今頃はさぞ泣いて居らうと。それは〳〵呆れた話。まんざら腹の立たぬでもあるまい。まんざらどころか大だちじや。喰ひ付いてもやりたいが。東京までは何里からうぞ。何じやと東京への里數か。手前泣いたつて追ッ付くかい。どうせ尋ねて行つたとて。ツイそこらに居ぢう筈はない。すて〳〵おいてもよい報ひが。惡性男に來るものか。何にしても業腹じやと。よるとさはると世間の噂。聞けよがしにはあらねども。さすがに末はわが妻と。親のゆるしの其人の。うき身の末を謠はれて。見捨てしながら知る人に。見らるゝ顔のはづかしく。口つぐま

るゝしをらしさ。アノ與三さんの氣の毒なと。悔まるゝ身に引かへて。月にさわれる雲もなく。もしや日頃の物思ひ。解けて嬉しき事もやと。はかなき事のたのまるゝ。娘でゝろの一すぢに。朝夕顏は見ながらも。人目の關のしげきまゝ。こゝろ語らふ折もなく。じれて障子に針のあと。さす鳥影に出て見れば。思ひもかけぬ其の人のオヤ與三さんか。よう來て下さんした。幸ひ母樣は觀音樣へ御參詣跡の者は殘らす畠。內には誰も居りません。お茶でもわがつて下さんせ。そしていつやらいふたこと。もう分別して下さんしたか。やつぱりお染さんにお心が。殘つてゞござんすか。何しにあんないたづらものに。未練も絲瓜もあるものか。それより今日は用があつて來ました。お母がお留守なら。また出直して參りませう。それは與三さんのあんまりな。男といふものはそのやうに。すげないもの

でゞざんすか。どうなと言ふて下さつても。何處に崇りもゞざんすまい。これは又してもお春さんの物數寄な。そのやうにいふて下さるは嬉しいが。われ〳〵風情がどのやうに。思ひを掛けて見たところで。及びもつかぬ事なれば。やさしういふて下さるほど。どうも切なうて堪りませぬ。あの與三さんの云はしやんすこと。そんなにお逃げなさんしても。何しに逃してよいものゞ。それとも眞からお厭なら。もう與三さんには逢ひませぬ。それではむごうござんせうお春さんのそれは誠か。此わたしをそれほどまでに。思ひを掛けて下さるか。及ばぬまでもそのお心。かならず仇にはいたしませぬ。それは嬉しうゞざんすと。結ぶ妹背の柴折戸に。またの逢瀨を契りつゝ。歸る男にすり違ひ。歸りし母は呼びとめて。態々こゝまで來てくれたに。留守にして濟みませぬ。さア〳〵內へお這入りと。手

をとるやうに引込れて。わたしの口からぢき〳〵に。いふのゝ妙なものなれど。チラリと聞いたこともあり。何かの事は抜さにして。この北見屋の跡(あとつぎ)嗣に。なんとなつては下さらぬか。ハイ有難うはございますが。さアそこが話といふもの。お前さんの家はお前さんの子でも立てられる。より合身上といふことにして。二つの竈を一つに直し。賑やかな煙りをたて。むつまじう暮(く)らさうではないか。兎角百姓は百姓の子に限る。すつての事で竈をつぶす所であつた。もしさういふ事にしてくれたら。それで天下は天平といふもの。

夢現

うつゝをうつゝ夢を夢
其けじめをば誰か知る
すまさし方を偲(しの)ぶれば

うつゝも同し夢なれや
人生はかなく五十ねん
夢に夢をばかさねつゝ
慈愛のはゝの胎を出で
寂たる墓のあなに行く
生死の旅路寢てさめて
覺てはうつゝ寢ては夢
たゞ繰かへす夢うつゝ
まことに覺ん時はいつ
片山かげにくさむしろ
そこを錦のしとねにて
夜でと〳〵に王こうを

夢みし乞食ありしとか
玉の宮居の夜はあれて
軒端かたぶく草のいは
王侯ゆめにおちぶれて
乞食と成しに似たる哉
あはれ思へば夢うつゝ
今は其名のかはれども
まことにさめん其時は
同じく夢のあとならむ
夢をうつゝに思ひかへ
うつゝを夢に思ひかへ
味氣なき世も咄たずに

此世たのしく夢に見ん

菊盃

（上）

狼の一聲吠ゑて。夜は靜かに。何ものぞ太平の夢に飽きて。鋤鍬の間に泣寢入る人の心は知らぎ。大空を覆ふ叢雲の。いやが上にひろがり蔓り。加茂のわたりを往きかひて。二條の城を仰ぎたてまつるものゝ。誰かは涙ならざらん。

絲竹の音色に流れし加茂の川も。いつしか月に闕けて。宵の騷ぎの跡もなく。我のみ長く影をひきて。五條の橋を歩み來る浪士あり。何思ひけん立ちどまりて。橋の欄干に身を寄せ。目に涙を落しつゝ

感慨に堪ねざるものゝ如くなりしが。暫くしてまた歩みを運び。足音高く乱れたる世を謠ひて。やをら小橋にかゝらんとする時。何れより酔ひての歸りなるらん。廻らぬ舌に呂律覺束なく。打連れ立ちたる四五人の長脇差。浪士を過しやりて後より白刃をかざし。むら〳〵と切つてかゝるに。浪士はかねて覺悟したるものゝ如く。ヒラリと身をかはして。白刃の中をくゞると見し間に。早くも腰にしたる刀を拔きて。大橋の中央に取つてかへし。追ひくる敵に打向ひ『いかなればかの〳〵方には言葉もかけぞ。かゝる無禮を働かるゝぞ。まづそれを承はらん』と云はせも果てず。『その譯聞かすまでもなし。痩浪人の分際として。徳川家に敵對する不屈者。無禮などゝは舌長し』と。口々に罵りつゝ落花微塵と切り付くる。浪士は素早く受け流して。『さてはかの〳〵方は。近藤勇が手下の者と覺ねたり

幸ひ夜中の事なれば。あたりに憚る人もなし。望みに依て正義の刃お見舞申さん。思はぬ殺生仕る』と。浪士は鋭き刀を振りかざして當るを幸ひ斬り倒し。をり重りたる死體の上に。腰打掛けて一息つきしが。其身も數箇所の手傷を負ひたるより。思はぞ血刀取り落したるに。死後れし一人の男。それと見て後より組付き。擬寶珠に打付くるよと見るまに。二人とも血しほに足をさらはれ。橋の上より眞轉倒。月は紅に碎けて。流るゝ水の音凄し。

堤の柳に身をひそめて。この有樣を見てありし一人の女。甲斐々々しく小褄をからげて。浪士を水なき砂の上に抱き起し。はや呼吸絶ねて此世の人にもわらぬを。『佐々木樣ア、、、、小十郎樣ア、、、、』と聲を限りに呼び活けるに。心の誠とゞきてや。『おのれ』と云ひさま起上るに。『お氣がつきましたか』と。懷かしげに取縋るを。浪士

はいぶかしげに見やりて。『これは遂に見馴れぬお女中。いかいお世話になつたと見ゆる』と。まだ夢の覺めやらぬ心地。年の頃は二十三四。身に纏ふ羽二重はたゞ名のみにて。いまは七ツ下りのみすぼらしく。額は月代長く伸びて。其境遇も察せらるゝが。色白く鼻筋通りて。目元清しく口元締りて。威あるうちに優しみを帶びぬ。女は怨めしげに見かへして『それではもはやお忘れなさりましたか。いつぞや鳥屋の奥座敷で。阪本樣や雲井樣との御一座で。大さうお醉ひなされたが。その時の膝枕。男の心と云ふものは。それほどにまで淡泊したものでございますか』『これはゝや恐れ入つた。併し見らるゝ通りの素浪人。縮緬の振袖には氣がさして。毛頭心にも留めざつたが。そして今夜の始末は』『ツイ我身の勝手ばかり。さぞお身體がお痛みなさりませう。妾の住居はアノ燈りの見えるあたりでございます。御難儀でもございませうが。今宵一夜は妾の住居で。ゆるゝ〳〵お話しを伺ひませう』。夜はいよ〳〵闌けて。按摩の笛に犬は痩すちん。

（中）

高瀬川の堤に向ひて。菊屋と記せる掛行燈あり。其の主人は藤江と呼びて。年は二十歳の上を越せど。他目には十七八の色香芳ばしく心ばへさへ優しきに。うき身を窶す人の多けれど。たれにゆるしの色ならん。柳の糸の靡くと見せて。靡かぬに男を下げるも少なからぞわきて此頃は座敷へも出でず。髮もくづれしまゝにて。藥土瓶とゝもにくぞふり。床に臥したる男に寄り添ひて。『もしあなに。けふはお氣分はいかゞでございます。お藥めし上りませぬか』といふに男は頭を擡げて。いろ〳〵と親切。實に忝けない。五尺に餘る男が

女の細腕に縋つて。面目ないが優しさにはだされて。心はあせれど手足はきかず。思はぬ人に世話になる事じや』と熱き涙を落す。女はそれを袂にうけて『アレまたそのやうな事を仰います。いやしい妾の介抱をお受けなさるも。何かの因縁と思召し。お氣長う御養生遊ばせ。そのうちにはまたよき芽も萌きませう』『そのやうにいふてくれるほど猶切ない。そして此頃は此身につきゝりい介抱。それでは猶々心苦しい。どうぞ我には構はぢ。勤める先へは勤めに出て。さういへば虫のよいやうなれど。心のうちを察してくりやれ』『お察し申してお氣の毒でなりませぬ。皇國の爲に一方ならぬ御苦勞。その御苦勞も斯うしてござつては。水の泡とお氣の採める事でございませう。それにつけてもお身體が大切。暫くはそれ等の事もお忘れなさつて』と。云ひつゝ沸れる藥を土瓶にうつして。『さア召上りませ』とさし出す。男はそれをやう〳〵に飲み干し。『今日はそなたの丹誠で。氣分がすが〳〵しうなつた。そして聞きたいはあの夜の摸樣。今考へて見れば夢のやうじや』『さやうでございませうとも。妾もあの時はどんなにか驚きました。てうどお手にかゝつたお士に折ありしく座敷が掛り。酒が云はする無理難題に。釣れてあれまでまねる途中。思ひもかけぬお客の亂暴。相手の方はあなた樣と。月の光りに見まがう方もございませぬが。女の悲しさに手出しも出來ずヂッと離れて見て居りました。その恐ろしさつらさ。身の毛も彌立つばかりでございました。それでもお身にお怪我の樣子も見ぬぢ。首尾よう皆のものをお刺止なさつて。ヤレ嬉しやと思ふと。何處に隱れて居たか。一人の男が後から組付いて。欄干の間から。もう思ひ出してもぞつとします。それからお側へ寄つて見ますと。はやお

身体は冷たくおなりなさつて。兎てもと思ふばかりでございました
が。神様のお庇蔭でございませう。斯うしてお世話申す様になりま
して』と。蒲團の隙を押ゆるを。男は其手を輕く握りて。『どうぐ弱
いものになつて仕舞うた』

豫州の志士佐々木小十郎は。斯くて藤江の介抱を受け。二月ばかり
の間に全快し。再び何處とも定めぬ旅に出でぬ。程なく王政古にか
へりて。再び天日を仰ぐに至りたるが。高瀬川のほとりに。今はあ
りし昔の影もとゞめず。

（二下）

本所綠町に冠木門いかめしく。佐々木經房と標札して。誰の目に
もとまる一搆。主人は日本橋遜萊社の支配人にて。後藤象次郎を社
主に戴き。貿易の事に從ひて。其名紳士の間に高し。

今日を　天長節の祝日と布告して定められたる。明治五年の十一月
三日。經房は朝まだきより身を清め。君が代の萬歳を祝し奉りて。
祝ひの何くれと自ら取まかなひ。其日は知れる人々を招きて。御代
を壽の酒酌まんと。それ〳〵文筥を廻したるに。午過ぐる頃には
。門は車にて埋められ。國旗其上に飜りぬ。

招待したる三十余名の客は。一樣に　聖壽萬歳　寶祚無窮を頌し奉
り。何れも主人の心づくしを喜びて。盃は淀の川瀬の水車に。時な
らぬ春は此室に滿ち。そこかしこに話の組は分れ。やがては席もく
づれぬ。主席にありし後藤象次郎は。主人に盃をさして。『さて御主
人。實にめでたき事ではござらぬか。今日の有樣を假令一時間でも
高山彦九郎などを。冥途から呼びよせて見せたいものじや』といふ
に。經房は滿面に笑をふくみて。『誠に仰せの通りで。われ〳〵共は

物の數にも足らぬながら。斯ういふ御代になし奉らんと。いろ〳〵と辛苦を嘗めましたが。なか〳〵三百年來引續いた德川家に。歯一本立てる事も出來ませなんだが。時節といふものは恐ろしいもので。勤王の方が諸國から起つて。いやはや德川の天下も脆い事でございました』と。快よく盃を擧ぐる。次に座を占めたる繼野といへる半白『ときに佐々木氏には其際なか〳〵意氣筋がござつたさうじやが。かういふ折に御披露なさつては』と。酒がいはする他愛なさも。主人はさすがに昔しのばれてや。ホロリとするを笑ひにまぎらして。『いやはや老ひ込んでしまひまして』と。跡はとりとめもなきことのみ。やがて坐敷は一人去り二人去り。十一時頃には殿の人も立ちぬ。主人は客を見送りて玄關に出でたるが。折ふしこの夜闌に。此門を訪ふ婦人あり。門番の老爺を呼止めて。『これは遲方にお邪魔を致しますが。佐々木小十郎樣と仰るは。こちら樣でございますか。わたしは藤江と申すものでございます。旦那樣にお目にかゝりたうて參りました。どうぞお取次を』といふに。門番は愛想もなく。『こちらは佐々木は佐々木でも。お名前が違ひます。外を尋ねて御覽なさい』と追ひかへすを。經房は聞きとがめて。『民平』と門番の名を呼び。『いまのお方は大切のお客樣じや。お呼び申せ』といふに。『さやうでございましたか』と。力落して歸りゆく藤江を迎へて內に入れぬ。其夜はいかなる夢を見しか。あはれ藤江が過ぎ越方を聞きたしゥ

肱つき

この肱つきを編てよと
かの君にしも頼まれし
其日よりはや四日五日

六日餘りになりにけり
あしたは早く起出でゝ
ゆふべは暗くなる迄も
とくしをへんと一筋に
たゆむ間もなきわが心
心はつゆもたゆまねど
人目の關のしげゝれば
その日かずのみ徒らに
積れどわざは捗どらぬ
契りし事をわすれしと
かの君はしも思ふらん
千々に亂るゝ糸よりも

苦しき胸を知りもせで
涼しき蔭にたちよりて
編めば見とめつ我友の
誰が爲にかと云つゝも
かの君ゆゑと我は知る
いはれし時の耻かしさ
したは嬉しく思へども
をぐらき窓に寄添ひて
あたりに心くばりつゝ
ひそかに運ぶ編ばりの
みちをてらせや飛ぶ螢
うしろに母の聲すれば

膝に隱してふりかへり
あまりに風の涼しさに
暫しと思ひて今までも

振分髪

四月七日の事であつた。上田より東京へ歸る途すがら。赤切符の悲しさには。善光寺詣りの參詣者が。ガヤ〳〵囀るのを聞かされ。それは〳〵非常に困らされた。午後二時頃漸く高崎で乘替となり。やれ嬉しやと思ふと相變らずの人込み。何れのベンチを見ても餘地なく。漸く予が隣りに二人分の空席があるばかり。折から日本晴とさて。玻璃越に天窓から照りつけられ。漸く新聞紙一枚奮發して日覆となし。誰やらんが呉れたビスケットを喰り初めると。一家族らしき五人連が。ドヤ〳〵と遠慮なしに這入つて來る。又かと五月蠅けれど困るは誰も同じ事。默つて席を讓ると。眞先に予が隣に腰を掛けたは。これは思ひもかけぬ。振分髪の十一二である。予は生來の子供好とて自然心も寄る。藤色縮緬に濱菊を染抜きたる被布を着て脊筋のすらりとしたる。白魚の如き手を膝の上に並べたる。取散した庭に鶯が來たやうな心地がした。ふり向く顏を見れば。まだ色薄けれど三日月形の眉。露滴りさうな眼元。花のやうな美しい口。笑ふ姿も思ひやらるゝに。白き顏にやゝ青味を帶びて。何となく淋しげに見受けた。予はビスケット喰ることも。退屈なのも忘れて見とれた。見れば見るほど可愛らしい。どういふ拍子かつい思はぞ口がすべつた。『見れば皆さんお困りのやうですが。お孃樣は私の膝へ乘せて上げますから。立つておいでなさる方はお掛になつたらどうで

すか』といふと。其愛らしき子供の母らしき人が。『それではどうも恐れ入りますが。暫くさうして戴きませうか』といふので。『まア宜い事ねー』と云はれて件の振分髪は我膝に腰を掛けた。すると初めての瀛車で直江津から直行したのなれば。『いたく醉うたと見えて。氣分惡しげに硝子窓を明けやうとしたが間に。合はず黄色いものを我膝に吐いた。母らしき人は氣の毒さうに。食いたものはすつかり吐げてしまうたのですが。先程の蜜柑でございませう。お着物をよごして濟みません』と云ふ『なんの腐つたやうな着物を拂うもんですか』と平氣で。それを拭いてやつたり。脊を擦つてやつたり彼是といたはつてやるものだから。乘合はした人は不思議さうに予が顔を見つめる。予は我子のやうにして濟して居る。兎角する内大に馴染んで。いろ〳〵な事を話すやうになつた。『お嬢樣は何處まで行きまし

すか』と問ふと『奠都紀念祭の見物に』といふので。東京までの道連と知り。退屈知らずに歸れる事と大喜びで。手荷物から繪のある本などを取出し。面白く瀛車の路を捗取つた。すると又吐きさうにするので。今度は横さまに抱てやると。そこは子供の無心さ。緑の髪を我頰に散らして。心地よげに眠つた。此時の我心の中には。天も地もなく名利もなし。たゞ此愛らしき夢の中に我魂を通はして居るかゝる中に瀛車は心なく馳せて。八時頃王子を過ぎた。『さア來た』と人々が騒ぎ立てる聲に。小娘は眼を覺して我膝を離れ。窓より首を出して上野の方を見ると。電氣燈が迎ゑ顔にキラ〳〵光りを放つて居る。それに賑やかな景色が近づいて來るので。小娘は小躍りして喜び初めた。此時は雨に逢ふた海棠に日が映たやうで。又膝の上にと思ふたが。はやくも瀛車は上野に止つたので。詮方なく『また』

て心をのこして別た。予も待つ人のあつてのこと。それより奠都紀念祭も馬鹿囃子の中に終り。今はゝや三年の上を越した。さても其時の振分髪。今頃は何處の空に何をしつゝあるか。予は思ひ出ださるゝ事の多さに。彼はそれも知らで日を送つて居る事であらう。

春の歌

梅薫枕（四首）

散ると見し夢はさめても思ひ寢の
まくらに通ふ軒の梅が香
うたゝねの枕に通ふ梅が香を
誰かうつり香と妹やとがめん
すき間もる月と風とに誘はれて
まくらとひ來る閨の梅が香
まくら邊に梅が香かくる春風を
花にはうしと誰がゝてちけん

春色浮水（三首）

水のおもに浮べる春の色見れば
浪の花さへ匂ひぬるかな
川添の柳の糸のなびくにも
のどけき春の影は見えけり
浪の花さくや梅津の川つらに
春たつ色ぞまづ匂ひける

雪中若菜（二首）

春の色をはつかに見する若草に
おもひもかけぬ泡雪ぞふる

鳴いてたつ雉子のあとをとひ見れば

雪間に青くもゆる若くさ

春風解氷（二首）

青柳も靡かぬ春の初風を

軒の氷のしづくにぞ知る

春風に氷も解けて小舟さす

棹のしづくも長閑けかりけり

閑居柳（二首）

塵の世を離れし人の心をも

ゆらがするらん青柳の糸

我のみと思ひし庵の青柳に

月もうき世をはなれてぞすむ

柳靡風

いと柳風のまに〳〵靡くなり

春のすがたを色に見せつゝ

水邊春雨

舟を呼ぶ聲もかすかに聞ゆなり

小雨にかすむ春の川つら

春山月

山の端のかすみを分けて出でながら

おぼろにあくる春の夜の月

夕雲雀（二首）

春日影のどかにくるゝ空わけて

月より落つる夕雲雀かな

ゆふ月の影もすみれの床のへに
　とこしめかねて雲雀なくなり

海邊霞

海の音は春に譲りてきのふけふ
　かすみをわたる須磨の浦風

名所花（二首）

咲つゞく梢のさくら匂ひ來て
　風に色あるみよし野の山

音にきく嵐のやまは名のみにて
　しづけき春の花ざかりかな

菫

むらさきの色春めきてかげろひの
　うちよりにほふ花菫かな

土筆

賤の女が薪に添へてひとつがね
　心づくしの春の家づと

蝶

雲かをる花の梢に寢る蝶は
　いかにのどけき夢や見るらん

林中花（二首）

松かしの茂る林の中にこそ
　あらしも知らぬ花のさくらめ

初瀬山檜ばらの奥のさくら花
　あらしの音も餘所に聞くらん

靜花見

見馴れつる庭の櫻の香をしめて
よそにはちらぬ我こゝろ哉

夏の歌

雨中新樹

あつさにもやがてたのむの蔭なれと
わか葉をそめて五月雨のふる

尋郭公（二首）

ほとゝぎすたづねわびつゝ詠むれば
松にのこれる有明の月

くれぬとも尋ねてさかん杜鵑
卯の花月夜しるべにはして

水邊卯花（三首）

下りたちて水くまゝしを卯の花の
雪にうもるゝ川ぞひの道

卯の花の下行く水やにほふらん
かくしら露の玉川の里

風そひてたつかとぞ思ふ玉川の
岸をうつ木の花のしら浪

鵜川（二首）

夜とゝもに篝火さしそひ鵜舟こぐ
かつちの川も月くらくして

月くらき川瀬すゞしく見なにけり
鵜舟さし行くかゞり火の影

新竹

ふしなれて巣だつ雀の羽風にも
靡きやすらん軒のわか竹

竹間夏月

吹く風に窓のくれ竹そよぎつゝ
見えかくれする月ぞすゞしき

海邊夏月

濱松の梢に月はかくるれど
すゞしき影は浪に見えつゝ

夏草（二首）

はたる草もゆる暑さもしら露に
すゞしくわたる野邊の夕風

しげゝれとはらはでを見ん朝夕の
露もすゞしき庭の夏草

水鶏（二首）

大方は叩く水鶏と知りながら
猶はかるゝ夜半もありけり

訪はれぬを心にすめる柴の戸は
たゝく水鶏も甲斐なかりけり

夏夕

かはほりの飛びかふ影の一つ添ひ
二つ添ひつゝ月出でにけり

螢（二首）

乙女子が招く扇によりくるは

思ひにもゆる螢なるらん
月影に露かと見しは螢にて
螢と見しは露にぞありける

納涼

雨晴るゝ楢の下かけ露ちりて
夏に知られぬ夕風ぞ吹く

松下泉

松の根に我と清水をのこしおきて
夏はいつくに流れいにけん

浦夕立（二首）

藻しほたく煙とゝもにくもり來て
うらわの浪にかゝる夕立

夕立の雲に追れてなる神の
はやてに騒くうらの釣舟

夕顔

葎生ふる賤が軒端の宵やみを
知らず顔なる夕がほの花

三月夜

（上）

世の中はつねにもがもな渚漕ぐ
海士の小舟の綱手かなしも

春風に闌にも梅は誇るらし。得ならぬかはり洩れ來るに。今しも歌

に心を寄せたる一人の朝臣。短冊に筆のはこびをとゞめて。思はず頭をもたけ玉へば。家臣比企の三郎障子物静に開きて入り來り。

『只今右大臣の君に急ぎ申入れたき事の候ふとて。長沼左衛門お次に控へ候ふ。夜もいたく更け候ふと覺ゆるに。御側の義如何取計ひ申すべき。何さま思ひ入つたる態にも見へ候はどに。追ひかへすも本意なく御取次申して候ふ。

と申上ぐるに。右大臣實朝々臣は。先つ頃鎌倉に遷し奉れる鶴ヶ岡八幡宮へ。明日は拜賀の式を執行ひ玉はんとて。とりぐ御準備の折から。闇ながら春の夜のすてがたくて。我宿の八重の紅梅咲きにけり。訪ひ來る人は訪ひ來る人はと咏みしたるまゝ。

『ナニ左衛門が參つたとか。時も時。急用とは心もとなし。いや何にもせよ苦しからねば早くこれへと申せ。

三郎は

『かしこまり奉る』

と平伏して退き。頓て左衛門は御側近く召出され。如何にしけん御顔を見ると等しく。袖に涙のせきあへず。

『右大臣の君には何事をも知ろしめされぬか。御いたはしう存じ奉る』

と。思はず聲を揚ぐれば。實朝々臣はいぶかしげに見かへし玉ひて

『左衛門は未だ一言にも及ばざるに。いかなれば斯る心なき事をいふぞ。明日は鶴ヶ岡に武運の長久を祈らんと思ひつるに。さる不吉の言葉其意を得ぞ』

と。物しづかに云ひ出で給へば。左衛門フト心付きて。

『これは恐れ入り候ふ。あまり心の打騒ぎ候ふまゝに何事をも申上

ねば。さやうに思し召したまふもことわりに候ふ。今日圖らずも二位殿よりのお召により。いそぎ駈付け候ひしに。よくこそ參りたれ。左衛門ならでは頼むものもなしとのたまひ。此度の事いふもつらし。いはぬもつらき事の起りたり。たゞ何事も我心を汲みて。其方よきに謀らひくれよとのおほせ。さて兄君逝去の後は。義時殿が無謀の企』

實朝は聞きもあへず。

『そはまたいはれなき事なり。北條家は我外戚なれば。何條さることのあるべき。それは他の見る目ならん。必ず思ひ僻めて人を疑ふものならず』

と。心には悟れど知らぬ顔に粧ひ玉へば。左衛門は言葉をつゞけて

『さやうに仰せ候へども。かゝるも世の中に候ふ。御心靜に御耳をかしたまはり候へ。故殿御存生の砌より淺からぬ御寵愛を蒙り。

今は執權職として威勢並ぶものもなきに。義時殿には飽くことを知らず。我君大樹の位にある間は。羽を伸すこと思ふにまかせぎ何とかして我君を亡きものになし。鎌倉へは京都より幼主を迎へ奉らんと。よからぬ計畧に心を碎きしが。此頃兄君が忘れ形見。善哉と申さるゝを尋ね出し。公曉殿と名づけて鶴ヶ岡の別當に居はせ。家臣横井木工介に内意を含めて。公曉殿を巧に說付けし公曉殿には何事をも知らねば。たゞ〳〵親の敵と覘ひ居り候へば明日の鶴ヶ岡の拜賀も心もとなし。大姫君といひ。兄君といひ今また我君にもしも不慮の事あらば。世にながらへて何樂みのあるべき。姉弟と骨肉は分けたれど。一人はわが子。由比ヶ濱に引きうつりてよりは。聞くとはなく鎧の音のより〳〵耳に入るに。今事を起さば我君の身こそ危うし。命だに全うせば再び元の世に逢

はん。一先づ何れへか身を避け給ふやうとのおはせ。たゞ世の態は斯くと思ひたまひて。御思案の程御明したまはり候へ』と。涙と共に物語れば。實朝々臣は既に覺悟やきはめけん。更に驚き給ふけしきもなく。

『これは慨はしき事を聞くものかな。われもかく思はぬにはあらねど。たゞ身をのみ全うして何かせん。されどわれ兎に角にならば院の御庭に葬や生ひん。たゞ心にかゝるはこれのみなり。もはや人に弓をむけられては。わが德り拾ふ所なし。難を聞いて遁れん は武將たるものゝ本意にあらず。もし公曉とやらに討たるゝものならば討たれもせん。實朝もはや覺悟いたしたり。母君には御心易く思し召さるやう申上げよ。たゞ此上は御前にまで弓をひき奉らぬやう。北條家へ御心添ひねがひ上げたし。今宵はもはや丑の刻にもなりつらん。鶴ケ岡拜に間もなければ。早く歸りてこの趣き母君へ申上げよ』

と。既に御座を立ち玉ふけしきに。

『そは御尤なる仰せは候へども。かくては二位殿の御苦心も水の泡と消ゆ候ふ。世に月花の里も廣う候へば。せめてはそれを御慰みに。何れへか御身の難を避け玉へ。さて恐れ入つたる儀には候へども。御形見として御裝束を賜はり候へ。必ず御名を汚すこと候ふまじ』

と云ふに。實朝々臣は暫く頭を垂れ玉ひしが。落つる涙をはらひたまひて。

『さらば我に代りて命を捨てんとか。その心の嬉しさは永劫忘るまじ。されど歎きゝ避けて歎きを見ること。同じ歎きの數にはもれ

ず。必ずさる事は思ひ留るべし』

左衛門は堪へかねてや聲をふるはし。

『そはいはれなき事を仰せられ候ふものかな。斯くて君の世にながらへ玉ふことを知らねば。おのづから北條家も心ゆるやかになり今日の歎きを明日は夢と見玉ふ事も候はん。たゞ何事も皇國の上を思し召たまひ。何れ亂るゝ世の中に。しのびても御所の御力ともなり玉はれ。左衛門も右大臣となりて相果なば。死後に思ひ殘さぬ面目に候ふ』

折しも由比が濱邊の松風浪にむせびて。友呼ぶ千鳥の聲もわはれや

（中）

獨り臥す草の枕の露のうへに
知らぬ野原の月を見るかな

建保七年正月二十七日。長沼左衛門は實朝々臣の裝束を身に着けゆゝしくも由比ケ濱の館を立出づる。心のうちこそわはれなれ。左衛門が鶴ケ岡の參拜とは知られば。御劍の役にうけたまはりし北條義時。かねて此時を外さずと巧みしことゝて。參殿の途中眼眩みたるさまにて倒れ伏し。

『只今まで別に異狀もなかりしが。心神俄に惱亂し。眼眩みて斯の始末。失體御免下されたし』

といひつゝ同じく供奉したる中原仲章に。

『御劍を御邊へ御頼み申せば。それがしに御排ひなく御參拜の御供われ』

と。御劍を仲章に讓りて退出しければ。夜はまだ明けやらぬ輿のうちに誰怪むものもなく。やがて二の鳥居にもなりければ輿をおろし

仲章一人隨へて社の階段近く進むに。風哀しげにふりたる松の梢にわたり。燈影曉闇に物淋しくきらめきて。こゝには右大臣を待ち設けたるけしきもなく。纐の音森を傳うて幽かに響きぬ。時しも右の欄干のわたりより。劍閃きしと見し間に。

『父頼家の御敵。恐れながら公曉唯今右大臣家の御首を賜はり候ふ』

と。物凄く騒ぐに。警固の列に加はりし實朝々臣は。此聲の耳に響きて。さては左衛門は相果てしと覺えたり。いと惜しき事をしたりと。涙ながら打騒ぐ中に立交りて。公曉が取り落したる首を。暗まぎれに拾ひ得て。何處ともなく落ちて行く。

實朝々臣は都に上りてせん術のありと。星月夜と謠ひし鎌倉山を跡に見。かはる姿に身も輕く。思はぬ旅に出でたまふ。まだ肌寒き春の空。道連れにせん蝶も雲雀も野には舞はず。匂ひにぼるゝ梅が枝に。殘んの月を遠山の雲とまがへて。長閑に霞たつ日のみぞ。しばし世の浪風の荒きを忘れ。宿の名殘の數を重ねて都に着き。二條の片ほとりに庵を搆へ。うつりゆく世を眺めたまふ。

『さるほどに公曉はゝや北條の手に討たれ。鎌倉には九條關白の嫡子にて。二歳にならせらるゝ若君頼經を召し下したるに。いまだ襁褓の中に何事も辨へ王はねば。義時は心のまゝに振舞ひける。さるほどに後鳥羽院には。王威の廢れたまふを慨かせ玉ひて。いかにしても北條家を滅さんものと。しばしだに御心安く思し玉ふことなく。院中に諸國の武士を召寄せ給ふ折から。北條の家臣仁科盛遠二人の子を召連れ。熊野詣の道すがら。後鳥羽院の行幸したまふに遭ひ。召出されて西面の武士に取り立て給ふに。流石に武士の本意とや思

ひけん。其まゝ止りて忠勤を盡しけるを。關東には深く怒りて。院の御恩し召しに反きたてまつり。廣遠が所領を沒收し。義時が我意日に募りゆくに。院は御怒に堪ねかね玉ひて。いよ〳〵北條を攻滅さんと仰せ出され玉ふ。新院の帝もおなじ御心にはおはしませど時の至らぬ事を慮り玉ひて。さま〳〵にとゞめたてまつり。右大臣藤原公繼。權中納言光親の兩卿も。御言葉添ねたてまつり。切りに時の不利を唱へて。諫めたてまつりしかども用ひさせたまはず。城南寺の流鏑子に事よせたまひ。五畿七道の兵を召し玉ふほどに。御謀略早くも三浦義村より洩れければ。思ひきや關東には二位殿の指圖にて。義時泰時を初め。相摸守時房。武藏守足利義氏。弐部丞朝時。武田信義。小笠原長清など名たゝる勇士に采配採らせ。十八万騎ばかりにて攻め上るに。かねて猛く見ねしものも。多くはあはたゝしげに逃げまどふのみにて。頼もしげもなく色を失ひける有樣に。箱根足柄宇治瀨田を。各所の御軍にも敗れをとり玉ひ。今は北條が無道の手にとらはれ玉ひて。遠からず隱岐の小島へ流され玉はんと。都はことに騷ぎたてゝうはさしける。斯くと聞きし實朝々臣は腸を斷るゝばかり。都に上りし時に思ひ定めし事も。世を忍ぶ身の徒らに月日と共に流れて。今は如何ともせん術なく。せめては隱岐の島に隨ひたてまつり。徒然なる朝夕を慰めたてまつらん。さなり〳〵と心にうなづき玉ひて。龜山越に鳳輦を待迎ね奉りぬ。

承久三年七月十三日といふに。御いたはしや後鳥羽院はさらでも堪ね難き殘んの暑さに。綱代車のあやしげなるに召させ玉ひ。道の警固に御心を閉ぢさせられ。涼しき蔭のなき世なりと思し召し玉ひてやう〳〵松江わたりに着き玉ひぬ。見かへれば都は何處。たゞ白雲

のたちふさがりて。いつ九重の宮居に過ぎにし跡をとはん。猶遥かなる浪路を凌ぎたまひて。櫂の雫に幾夜寢ざめの御心地。この世のおなじ御身とも思はず。

（下）

山は裂け海はあせなん世なりとも
君に二こゝろ我があらめやも

實朝は遙々院の御行衛を慕ひまつり。五日ばかり後れて隱岐の島に着き。磯の苫屋に身を忍びたまひて。けふはしたしく龍顏を拜したてまつらん。明日は昔を物語らん。建保の春の御歌合せも思ひ出されて。いとも御懷しく思へど。守衛の武士に。心を隔てられ。容易くは行宮に近づかれず。いかにせばよからんと思ひを焦して。やう〳〵一策をめぐらし。釣垂るゝさまに竿を肩にかけて。行宮のほとりを行きかへりに。朗詠集を節おもしろく吟じたまふ。果せるかな院は早くも御耳にとめさせられ。いと床しくおぼしたまひ。侍從士屋時義を御側近く召して。

『あれを聞かずや。文時が夏の池水の詩。凉しげに吟ずる聲の聞ゆるか。定めて都のものならん。早く呼びかへして朕が徒然を慰ませよ』

程なく實朝々臣は時義に伴はれて。絶えて久しき御謁見仕りぬ。院は一目見そなはし玉ひて。

『そちは鎌倉右大臣ならずや。かはる所にてめぐり遇ふものかな。さても鶴ヶ岡拜賀の曙ありし砌り。たしかに公曉に打たれたりとの取沙汰。唯いかにせしか其時首の行衛を失ひしと聞きしが。かゝる健かなる姿の世にあらんとは。さるにてもいかなればかゝる

所には流れ來しぞ』

實朝々臣は懷舊の涙にかきくれて。暫しは言葉も出でざりしが。

『これは有難き御言葉に候ふ。實朝由比ヶ濱に候ひし時。家臣の勸めにまかせ。蘆分小舟障り多き世にあらんよりはと。暫し身を都の片隅に避け候ひし時。はからぬも御いたはしき便りを洩れうけたまはり候ふまゝに。御跡慕はしく此まで參つて候ふ。何事も夢と消え行く世の中に候へば。御心長閑にこそ願はしけれ』

院は龍顏麗はしく笑ませ玉ひて。

『よくも云ひたり。世を味氣なきものと思へばこそ人もをし人もうらめし。世を思はねば物思ひもなし。怨みなば限りもわらじ。思へば思ひはつきじ。汝とゝもにあらん限りは。何を心に滿たぬ事のあるべき。馴れては海の眺めも潤し。うす紫の遠つ島山。遠く都は隔てたれど。春來れば花も咲き。秋來れば雁も落ちん。世はかくてこそ心安けれ』

とのたまふに。實朝はひそめし眉と共に心も開けて。

『げに宣う如くにて。たゞ今の御言葉如何ばかりか嬉しう覺へ候ふ』

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

霞に波は色をやどし。浪に霞の影をうかべて。世はわら玉の春となりぬ。鶴はのどかなる空に舞ひ。鶯は軒端の梅にうたひて。山に添ふ水の色よく。水に添ふ山の色よし。實朝々臣は裳裾を高くからげ箒を執りて庭に一刷毛。

けさ見れば山も霞みて久方の
あまの原より春は來にけり

天の原より春は來にけり。とうたひながらに仕丁の業を勤め。ひとり興に入り玉ふ。後鳥羽院も御椽の端に立出給ひて。實朝々臣を呼び近づけ玉ひ。

『指折れば今日は正月元日に當れば。眼に入る景色に箸を加へて。年始を祝ふ酒くまん。春は幾度か迎へたれど。今年ばかり心伸びやかなるはあらじ。都の事も今は思ひ殘さず』

とのたまひて。御手づから御觴を下したまふ。實朝は恭しくおしいたゞき。

『かゝる時にも昔の例を思ひ出でたまひて。いと有難く覺え候ふ。そも此島に宮仕へ候ひしより。淺からぬ君の御寵愛を蒙り。久しく音に出でざがし歌さへ。今は百首ばかり詠出でゝ候ふ。まことに宣ふごとく。世はかゝる處こそ住みよかるべく候ふ。君聞し召せ。心なき山も笑ひ。心なき海も歌ひ。磯打つ浪の皷。松吹く風の調べ。皆大君の萬歳を祝ひまつりて候ふ。むかし涙を添へてうけたまはりし。隱岐の小島に我ありと。歎きし人の心こそ。今はなかゝつれなく思はれて候ふ』

と。何樂ませ給ふこともなき離れ島に。なぜか都なつかしく思しめさぬ。御心おしはかりたてまつりて。御いたはしう涙催さるゝを宣ふまゝに笑ひ興じたまひて。大御心を慰めたてまつるに。院は斜ならぬ喜ばせたまひて。

『實にもさる事なり。されど山にも海にもかへがたき眺めは。卿が忠義の心ぞ。空しくよせてはかへす浪に齡を刻まれ。此島蔭に味氣なく世を終るべきを。思ひ設けぬ空にはるゝたづね來りて。憂きは昔の夢ばかり。島守となりて經ちし月日もはや五月。一目

の中に月雪花と眺め過して。樂しかりし日ぞ多かり。落葉を誘ふ夜半の時雨も。男鹿なく夜半の寢覺も。あはれを語る人あれば。あはれには思ひ惱まず。待ち詫びし都の便りも。眺め暮せし船の帆影も。今は絶えてなかれとこそ思ふ。」

と。笑ましげに宣ふに。實朝々臣はいとゞ感涙に咽び玉ひて。

「御言葉身に餘りて候ふ。實朝鎌倉に候ひし時は。小松殿より後に例なき。左近衛の大將を拜し奉りしも。權威は徒に北條の手に奪はれ。鴻恩の萬一だに酬ひたてまつらぬ。かゝる事にならせ玉ふ事の甲斐なさに。日夜心を痛め候ひしに。露の命ながらへし本意もとゞきて。萬世かけて得がたき御言葉。返し奉る言葉もなく候ふ。」

院は再び御觴を手にとり玉ひて。

「さることをな云ひそ。思はず忘れし涙も誘はるゝ。」

と。御庭の方に見かへり玉ふ。檐端に生ふる千歳の松ば。浪の千里に綠をうつして。大御心の春ぞめでたし。

田舍新年

垣根の梅は咲きにけり
藪うぐひすは鳴初めぬ
けさ立かへるあら玉の
年のはじめを祝ふとや
まばらに立る草の屋の
軒端のき端に旗見えて
ゆたかに靡く朝けぶり
まだき霞にまがふなり

門田にならぶ稻むらの
　あたりに群て里の子が
いかのぼす糸くり返し
　君が代うたふ聲のして
朝日にむかふ山はたの
　畝のかれ生に乙女子の
はねつく音も聞えつゝ
　わらふ聲こそ長閑なれ
ことはぎぐるま馳廻る
　都のおは路いかならむ
きぬ着飾りて往かへる
　都のひとやいかならむ

この山里のしづけさは
　昨日も今日も變らねど
改たまりぬる年ぞとは
　ひとの心に知られつゝ

手鞠歌

（上）

羽子一つ失くして二つ拾ひ上げ。扼分髪のわどけなく。つく數さへも節つけて。唄へる聲の長閑さに。雪の下なる梅の花も。訪ふ鶯の羽風に匂ひて。人の心に春は來にけり。

もし繪に寫さるゝものならば。この景色に添えて寫したきは。今し

も丸窓に肱をつきて。降り積む雪に小犬の狂ふを。他愛もなく見とれる處女の姿なり。年は二十歳の上を越すまじ。一難もなき白き顔に。烏羽を欺く黒髪を高髷に結び。驪山の烽火もこれにはと思はるゝが。月を宿せる眼元の露。花を浮べる笑靨の波。何れの人に袖にこぼれん。

『お嬢様』

と。唐突に聲掛けられて。

『乳母や喫驚したよ』

『これは〳〵御免なさいませ。最前から何を御覧なさいますか。おや〳〵小犬の可愛いこと』

『ほんとうに可愛いのねゑ。そして何か用でもあつて』

『お正月ですもの。何の用なんぞがございませう。今日もまた歌留多でも弄つて。お嬢様のお美しいお顔へ。墨を塗つてお上げ申しませう』

『さうねゑ。大方乳母やの相手になつたら負ける方であらう。お前がよ。それに午からになれば正木さんもお出でなさる筈。歌留多でも弄つて遊ぶも宜からう』

『それでは歌留多の方はお約束が出來ましたから。今度はお代りを今一つ御相談申しませう。これも大抵なら乳母やにお任し下さるでございませうねゑ』

『それだつて云ふて見ねば分らぬものを。乳母やの事だから何の相談にでも乘るけれど。その代り昨日のやうにお嫁に行く話は。どうぞこれからせぬやうにしておくれ。それは宜いかゑ。そしてその相談と云ふのは何の事かゑ』

そんな冒頭なんぞして六つかしう言はいでもよいに。先を越されて續く言葉も出ず。いかにお年を召さぬからとて。そのやうに駄々を仰言つては。とは流石に打付けても言はれず。

『それほどお嫁におなり遊すのがおいやなら。いつまでなりとお一人でお居でなさいませ。その代り乳母は今日からお暇をいたゞきます』

『それは乳母や無理ではないか。もう一年學校へさへ行けば。それから先は何處へでも行くから。それまでの間どうぞ辛抱しておくれ』

そりやア私が辛抱するのせぬのではありませんが。お嬢さまがどうしてもお嫁においでなさらぬとなれば。乳母は行屆かぬからと旦那様に御叱言をいたゞくは知れて居ります。それを一年の二年

のと御悠長に。そんなことはもう御仰らずに。それも旦那様が御無理を仰言るのなら。乳母が何でこんなにお勸め申しませう。先方のお方は去年の春本郷の大學とやらを卒業なさつて。今では文部省とやらへお通ひなさる立派なお身分。それにお嬢様がお茶の水の學校で。讀書がようお出來なさるといふのでお見込をお付けなさつて是非さういふ娘が欲しいと言ふ所から。よい手蔓があつて今度の縁談。それでございますから。お嫁にさへお出でなされば。どんなにお可愛がつて下さるかも知れません。乳母なんぞは一時でも夢になりとそんな目に逢うて見たい思うて居りますが。なか〳〵三遍も生れ代らねば出來ません。そしてもう一年學校へ行くと仰言るのが。この乳母には一向合點がまゐりません。なる程一年でも餘計に學校へお通ひなさらば。それだけお身体に藝は

付きませうが。もうお嬢様の位お出來なされば。何處へお出でなさつても。押しも押されもするものではございませぬ。それとも たゞ學校へお通ひなさりたいばかりなれば。先方様とどんな話が付かぬでもございません。兎も角も先方様からは人に人を代へて のお申入れ。似合ふたり叶ふたりでございますから。旦那様がやきもき仰言るのも御尤もでございます。それに何うせ何時かはお嫁にお出でなさらねばならぬもの。早いも遲いもつまる所は同じことで。たゞ一年でも遲くなると。年を拾ふばかり。損こそゆけ得になる話ではございません。斯う申しますと品物でも賣るやうに聞えますが。何でも人が賞翫する間が花でございまして。その時を過すと。事によると賞翫せられた花も風に散らされて仕舞ひます』

『なる程お前のやうにさういはれて見ると。何にも返事は出來ぬが實は外にも少し譯があつて。是非とも此話を一年だけ延ばしてもらひたいと思ふが。乳母や賴みだからさうしておくれ』

さう仰言ればまた話が變つて參りました。それではお嬢様は外にお氣に召した殿御でもございますか。

『何で妾にそんな猥りな事が出來やうぞ。もう〳〵そんな事は聞きたくない』

それでは譯といふ譯を仰言つて下さいませ。その譯を伺ひましてから。お嬢様の仰言る事に筋道さへ立ちますれば。そりやアお嬢様の仰言る通りにならぬものでもございませぬ』

『そんならそれを問はずとも。たゞ譯があるものと思うて。お父様の所をよう執成しておくれ』

『それではどうも困りますねえ』

（中）

『お前がそれほど迄に心配をしてくれるものを。默つて居るのも氣の毒。耻しいけれど譯といふ譯を話すから。厭でもあらうが聞いておくれ。忘れもせぬ一昨年の夏の頃であつた。學校の往復りに言合はしたやうにお茶の水橋の袂で出會すお方があつた。鰹茶に變つた洋服を召されたるが。帽子は大學の正帽であつたから。大學へ通ふお方には相違はあるまい。別にそのお方がどうの斯うのと云ふ事はないが。毎日顏見合はすにつれて。おゐ〳〵懷しいやうな氣がして。偶に雨でも降ると。妾は車で行くものだから。その時は道で逢ふ樂みもなく何となく氣の拔けたやうな心持がしてとり〳〵坊主を拵へた事も幾度あつたか知れなんだ。それから追

々逢ふ日の重なるに連れて。途中で思はず頭を下げると。そのお方もお笑ひなされて。帽子をお脫りなさつた。それからお前も覺えてお居でゝあらうが。雨上りに轉んで。車夫の世話をして下さつたお方があつたのを。それが今いふ大學へお通ひなさるお方で其時妾の名をお尋ねなさつたから。名刺はもたず。折あしく鉛筆もなく。何うしたらと思ふうち。持合はした寫眞に姓名の記いてある事を思ひ出し。これでも宜しうございますかとさし上げたらこれは何よりも有難うございます。必ず大切に秘藏して置きますと。それは〳〵お喜びなされて。車の影のかくるゝまでお見送り下さつたが。其時の嬉しさは今も眼にあるやうで。次の日にお目に掛つた時は。何と御挨拶を申したらよからうと。朝早くより出掛けて。待てども〳〵待つお方の影は見えぬ。それより今日は明

日はと。三日また四日。十日になつても。一月になつても。どうなさつたか。それよりはお目にかゝられず。お國へお歸りなさるお方であつたのか。それとも御病氣にでもおかゝりなされたのか心にかゝりながら。いつの間にか三年越となつたが。不思議なのはこの頃痴水といふ方が作つた。初戀といふ小説を讀んで見ると名こそ變れ時も處も事柄も。その折の事を生寫しに書いてあるがもしや其痴水といふ方が。其時のお方ではあるまいか。別にその方と一緒にの何のと云ふ譯ではないが。も一度お目にかゝりたいもの。何うかよい工夫はあるまいか』

『譯と仰事るのはさういふ事でございましたか。それがせめてそのお方のお名前でも御存じのなら兎も角も。雲を攫むやうな探し物をして。一年かゝつたからとて知れるものでもございません』

『それもさうじやが。もしこの本をお作りなされた痴水といふお方が。その方にして見るとお宿所の知れぬ事もあるまい。世間を憚つたものか。この本には本名も出してないが。出版した書林にて聞けば分らぬ事はない筈』

『それもさうでございますが。そのお方と御一緒におなりなさるお積りでさへなくば。またいつでもお逢ひなさる位の事は出來ぬ事もございますまい。それより早く今のをお取極なさる方が宜からうと思ひます』

斯る事を語り合ふとは知らず。學校友達なる正木靜子といふが。下女のお松に導かれて室に入り。

『おめでたう』

といふを機會に。乳母は己が時にかへる。

『園子さん。貴嬢もこれをお持ちですか。私も先日買つて讀んで見ましたが。大さう面白うございますのねえ。貴嬢も御覽になりましたらうが。寫眞を女から男に贈る所。何としてあア旨く書けるものでございませうか。小説家といふものはいろ〳〵な事を書くものでございますねえ』

『靜子さんも寫眞の處が宜しうございますか。私もあの寫眞の處を一番面白く讀みました。あの痴水といふ方の本名は何と云ふのでせう』

『私はさういふ事は一向存じませぬが。何でも大學から出た方で。駿河臺に住家があるとか。誰でしたかさう言うて居りました。そして今日はまだ二三軒お附合がありますから。また二三日内にゆつくり伺ひます。實は源平でもせうと樂んで居つたのですけれど

それもこの次にお願ひ申します』

靜子がかへりたる跡にて。園子は思ひを千々に碎きたる末。駿河臺と云ひ大學出身といひ。痴水といふお方は其時のお方に違ひはあるまい。もし其時のお方ならば。其お側に居らるゝやうになつたら。何んなに嬉しからうぞ。凛々しいあのお眼に優しさが充分こもつてそれともに其後お顏をお見せなさらぬ所を見ると。あんなにやさしう仰言つたのも。たゞ當坐の慰みにおからかひなさつたのではあるまいか。何にしても一目なりとお目にかゝりたいものと。動もすれば立消えとなるべき戀を。新小説によりて堅められぬ。乳母が千万の言葉を並べて。仇し人に手折らせんとするも。今は狹き胸にも決心の上なれば。容易く靡くものとも見えず。逢ひ見ての後の心に比ぶれば。昔は物を思はざりけり。

（下）

如何に考へ直しても。痴水といふはあのお方に違ひはない。もしそれかあのお方であつたら。あのやうに小説にお書きなさる程じやから。まんざらお心に掛けておいでなさらぬでもあるまい。何にしても早うお目にかゝりたいもの。どうしたらお目にかゝられるであらう。乳母もあア云ひ出したから。また何んのかのと言ひに來るに違ひない。どうしたらよからう。もうまゝよ。何うせ一度は耻しい思ひをせねばならぬもの。あの本を出版した尚書堂で聞けば。其お方のお宿所は知れるであらう。といつて自分でまさかに出かけても行けず。自ら問ひ自ら答へて。寧そ手紙がよからうと。園子は筆を執つてまた暫し首を傾け。

世には似たる事も多く候まゝ。この文のいかにお笑ひの種とならんも知れず。御耻かしくは候へども。一筆申上まゐらせ候。先頃貴作初戀拜見致し候處。思ひ當る事かず〳〵これあり候てもしや御許様の御やさしを。文字に御現はし成されたるにはあらざるかと。女の淺き心に察せられ。御懷かしく存じ候。もし妾の名を御存じなれば。かゝる事申上る心の中も。大方御酌取り下さるゝ事と存じ候。この頃心にあまる事もこれあり候まゝ是非お目にかゝりたく。御許し下され候はゞ。譬へんやうもなく嬉しく存じ候。たゞこの上の御かへしを。

これでは何だか男の手紙のやうな。もしお人違ひでゞもあつた時には。却てこの位にしておいた方がよから。うそれでもこれではあんまりと。料紙を卷きかへし書直して。漸く一封の書狀を認め。

年月を思ひふる井のかたつるべ

はねても水のこゝろ酌まなん

と一首の歌を添へて。下女のお松に思ひ掛けぬ小遣錢を取らせ二三軒隔てたる車屋の若き男に。尙書堂より宿所を問はせ。件の書狀を痴水に渡させぬ。痴水昨夜の夢見は如何に。

あアして手紙は出したものゝ。この先どうなることゝ。流石に娘心の穩かならぜ。たゞ使の者の歸るを待ちくらして。家の內はゝや薄暗くなりぬ。フト明り窓の障子を開けば。今まで晴れし空は雪になりて。積る思ひの上にまた。降つもる。

お松は鬼の首でも取りしやうに。嵩のある手紙を持ち來り。

『大さう先でまたされたさうでございます。オヤ〳〵もう暗うなつて來ましたねえ。今お灯を點けて參りますから。ゆつくり御覽なさいませ。

とて件の手紙を渡し。

『そしてお孃さま車夫さんが大喜びでございますよ。先方の旦那樣は雪の中を御苦勞であつたと。姪子樣を一枚下さつたさうでございます』

『姪子樣とは何の事かい』

『あのお紙幣の事でございますよ』

新年の御慶御同樣目出度存じ候。今日は思ひがけなく御手紙下され有がたく存じ候。御推察に違はず。小生はお茶の水橋にて御寫眞を頂戴したるものにて候。其時の嬉しさは筆紙に盡しがたく。また翌日も御目にかゝるを樂しみに御別れ申候ひしが。よく〳〵考へ候へば。此上毎日御目にかゝり候はゞ。いかなる不了見を起し候はんも知れず。かくては小生はまだ學生の身。

貴嬢とても大切の御身故。たとひ御心のほどを承り。切なる望みの叶ふにもせよ。末遂げぬ契りに先の歎きを見んよりはと。我と我心を勵まし。立派に身を定めたる上にて。もし御縁もあらば御迎へ申さんと。廻り道して學校へ通ひ候うちにも。もう今頃はと思出しては。矢も楯もたまらぬ。はしたなくも元の道へ引返せば。もはや時後れて御姿を失ひし事もこれあり。堪ねがたきを忍びて。漸くお目にかゝりし四角の帽子も。昨年にて冠り納めと相成り。昨今は文部省に通勤いたし候。就ては妻帶してはと申す者もこれあり。誰彼と勸めらるゝにつけて。御身の事を忘れかね。御身も未だ定まる御縁もなしと承り候て。幸ひよき話の手蔓もあり。御迎へ申さんと口を入れ候へども。娘の所をとのみにて確の御返事もなく。さては御身に故障ありて

のことゝ存じ。三年の物思ひを夢となし。せめての思ひ出にとはかなき戀を世に歌ひたるが。人の其事をいひ出ださるゝ毎に御身の事のいぢわるく胸に浮びて。如何に思ひ絶ねんとしても絶ねず御身の影のみ追はれ。またも人を代へて果敢なき事を申入れ候ひしが。それも仲人の口の調ふらしきは當にもならず。今日も此雪にひとり詫しく暮し居り候折柄。思ひしに似ぬ御手紙。御身々其時の事を忘れ玉はず。數ならぬ小生へ心中おん立下され。これ迄貴嬢の故障も小生の名を申上げざりしよりと察し候ては。天へも登る嬉しさとは此事に候はん。足の蹈み場も失ふ程に候。餘はおん目にかゝり候節。この雪よりも積る思ひを。先は御返事までであらく。

一月三日

朝夕放さぬ

寫眞のぬし樣參る

園子は夢かとばかりの嬉しさを。讀みかへし〳〵てもまた膝に。見るとも知らず乳母の來るに。

『オヤ乳母やか』

『乳母が來ましてもゝう先刻のやうなお話はしませぬから御安心なさいませ。旦那樣も園が厭といふのなら。無理にはすゝめなと仰言いましたから』

『そんならお父樣がさう仰言つたの。もうあれは取消して。矢張お嫁に行きませう』

『エゝそれは本當でございますか』

雛妓又平

（上）

春のあしたの花むしろ
　秋のゆふべの月のゐん
つはもの共が結びたる
　夢の跡までたづねつゝ
移行く世のさま〳〵を
　筆にうつして傳へたる
やさしき雅を後の世に
　流れをくみし人のみか
歌舞伎に迄も上りたる
　手洗ひ鉢のしきいしに

のこすその身の繪姿に
　吃のうき世の又へいが
はまれを聞ば世の人は
　唯名のみにも寄ぬなり

《下》

いつとも時は過し夜に
　あまたの人と酌かはし
酒にうき世の忘られて
　耳につゞみの絶音なく
心うきたるうたひ女が
　仇なるふしに飽し頃
かざす扇のそでかろく

ひとり立舞ふ乙女あり
年は二六のはるあさく
　花のくちびる月のまゆ
柳にのびるくろかみを
　てふ〳〵髷に結びなし
かざしのふさの片々と
　顔にかゝるを麗はしく
笑へば雁も落ちぬべし
　語れば魚もしづむべし
ちゞみの絹の幾かさね
　うへはしら茶に染模様
絹代にくみし市まつに

牡丹の花をうかしたり

あまり起居の優しさに
あまり姿の愛でたさに
人はいかにか思ふらん
我にもあらで見惚しが
見るほどもなく其舞は
三すぢの糸の音に連て
あらしに花の一さかり
やがて終りを告にけり
思はせ肩に手をそゑて
其名を問へばはゝ笑て
うかるゝひとの心には

春の見ゆれど我身には
秋もきむらのまた平と
答ふる態もしをらしゝ
さすがに親も有なんに
うき川竹にしづむ身の
哀れはさこそ深からん
空にしられぬ一しづく

少女畫

（上）

あゝ松島や松島や。幾度見ても飽かぬは此處の景色。僕が東京を出てこゝへ來てから早や一月。毎日所々方々を見たが。此處の景色は

もよい所はない。此儘ソックリ描きたいと思ふが。まだ筆が若いので思ふやうにはゆかぬ。西洋繪畫品評會は近いたが。それまでには是非名作を畫き出して。一等賞にありつきたいと思うて。遙々と松島旅行を企てたが。實に覺束ないは此度の手際だ。全体景色畫より人物畫の方が僕には得手と見ゐる。人物畫にしやうか。イヤ是も好きモデルがなくては出來ぬ。

天は此好景色を與へて。我等畫家を幸したが。幾度寫しても心にかなはぬ。筆を下しては抹し。抹しては描き。半日此處に坐りきりに坐つたが。すこしも畫の形にならぬ。遂には心身共に。疲れてもはや筆は少しも動かぬ。

時は丁度初秋の事とて。秋風そよ〳〵と梢に音づれ。今まで照り付けた額を冷してくれる。名の知れない美しい鳥が美しい聲で囀つて

僕が居るのも知らずにすぐ傍の藪の中に遊んで居る。弓手の方の山毛欅の森の下陰は薄暗く。白き草花の咲いたるがよく見ゐる。無數の昆虫のブー〳〵いふ聲と。木の葉の秋風にそよぐ音と調和して。一種いふに云はれぬ音樂を奏して居る。木樵の通る細き山路の兩側には。秋の七草が自慢顔に咲亂れて居る。中にもなまめかしいのは女郎花。細いやさしい莖に。黄色な粟粒のやうな花を見せて。心ありげに人を招ひて居る。美術の女神の外には握手すまいと決心した心も。そろ〳〵動き出して來る。それに尾花といふ癖物があつて。一風毎に頭を下げて媚びて居る。蝶は愉快さうに狂ひ廻つて。あちらこちらの草花に戯れて居る。

アヽ好い心持だ。何とも云はれぬ心地がする。名畫の出來ぬ心配も忘れてしまつて。睡氣がさして來た。美人の髪のやうに柔な草の葉

が。僕の顔を擦すると思ふ間に。何時しか眠てしまつた。

人の物云ふ聲に驚かされて。不圖目を覺まして彼處を見ると。これは又思ひ掛けぬことである。木樵の外には來る人もない此處に人影しかも少女の姿。年は十四五でもあらう。白地の浴衣に縮緬の帶を締めて。片手に花籠を持つて草の上に坐り。唱歌を歌ひながら。下向ひて無心に草花を摘んで居る。時々見上る顏の美しさ。富士に夕陽のさしたやうた頰に。清しい眼元。可愛らしい口元。實に抱きもよぜたい程である。油氣のない長い髮は兩肩から流れて。膝迄屆いて波打つて居る。横から見ても縱から見ても。田舍育ちの娘とは見ねないに。どうして人も稀な山中。松島から一里もある此山中に。一人で來たのか知らぬと思ふといよ〳〵不思議だ。森の下の藪がガサ〳〵鳴るかと思ふ間もなく。スペイン種の肥太つた犬二匹。驀然に馳けて來るに驚いて少女はたつた。が又坐つた。犬は馴れ〳〵しく尾を振り。少女の傍に來て。舌を吐いて横になつた。少女は可愛らしい手で。犬の首環をとりはづして。花を周圍に結びつけて花環を作り。それを犬の首につけて。『オー黑よ。よいこと』と云うた。

（下）

間もなく。犬の跡から來たは。二十二三の背の高い青年。獵服に大學の四角な帽子を戴き。植物採收の箇を肩に掛けて居る。少女は青年を見て笑ひを含みながら。

『兄さん。何か採つて』

青年は箇を肩からおろして少女の傍に坐り。

『僕はまだ何も採らないが。お清は大さう花を摘んだね。オーそれは何と云ふ花だらう。實に美しいね』

少女は自慢らしく嬉しさうに。藤色の花をとりあげ。青年の胸にさして。

『兄さんは植物學者でおわりなさつて。此花の名を知りませんか。狐花ですよ是はあげませうね』

青年は笑ひながら。

『植物學者はお前より無學かね。狐花といふ花はツイ聞いたことがない』

彼等は僕の居ることも知らないと見える。

『嬉しいことね。今日は。何時も今日のやうに嬉しかつたら何んなに宜いでせうでも。兄さんは直に東京へお歸りだから悲しいワ。何時行くの』

少女は突然さも心細さうにいふた。

『土曜日。今四日しかない』

『土曜日に。ほんとうに悲しい。母さんがあのやうに酷い人だから私も兄さんと一所に東京へ行きたい。小學校は來年卒業するからモー東京へいつてもいゝワ』

『母さんは酷い。さう。さういつちやわるいが母さんは鬼だね。僕も實に堪らむ。いくら繼母でも。モー少し優しく出來さうなものだ。お前の實の母さんが丈夫であつた時分は。有りがたい事ばかりであつたが。鬼が來てから一日も不平のない。日はないそれに去年から學費も送つてくれないから。大變困つて。實家から三圓送つて貰ひ。其外は翻譯をやつてやう〳〵勉強して居る。何處にこんな養子があるものか。それに昨日も昨日で。あのやうな失敬な事ばかりいふから實にたまらん。時々家を出やうと思ふこともあ

る。たゞお前が可愛さうだから辛抱して居るが。モー堪らなくなつて來た』

『おら兄さん。そんな酷い事を。どうしよう。兄さんが内の人でなくなつたら。兄さんどしようだから。何時までも兄さんになつていて頂戴な。母さんは内から出ろといふても』

少女は諸袖で顔を掩ひぶる〳〵ふるひながら。青年の膝の上にもたれた。青年は少女の背を擦りながら。

『泣くなお清。必ず出て行くともきまらないよ。たゞさう思ふこともあるといふだけだ。しかし出て行けといはれりや却て有りがたい。すぐお暇だ』

『だから私は悲しうて。少とも私を可哀さうと思つて下されないもの母さんは五六日あとの晩。兄さんを出して園部の善治さんをもらいたいつていつたら。父さんは靜雄は少いから養うた義理ある子だから。さうはできないといひましたもの。私はいやあんな人は。兄さんどうぞ私を東京へつれて行つてね』

青年はいたく驚いて。

『さうか。そんな事があるならいよ〳〵居れない。義理づくで養はれて誰が居るものか。お清。僕はもう兄さんじやないよ。お前には善治さんといふエライ學問の出來る金持の兄さんがあるから。東京へつれて行くことは無論出來ない』

彼は時計を出して。

『あゝモー四時だ早く歸らう。一所に歸るとまたやかましくいはれるから。僕は先に歸るよ』

少女はあはてゝ。

『一寸待つて頂戴。兄さん一寸』

『いけないよ。五時から例のお職があるから。お清。僕はお前を忘れないよ。決して。しかし。モー兄さんじやない。善治さんはよい人だよ。お前は嫌がるけれど』

少女を見おろした眼には涙がいつぱい満ちてあつた。青年は急に筒を肩にして去つた。少女は慌だしく立上らうとしたが。力ないやうに見えた。やう〳〵右手で木の枝に縋り付いて。絲の髪を振亂し身體を少し捻つて。其人の行く方にふり向いた顔。あゝ其顔。しかし其哀れな少女が。僕の爲にはよいモデル。品評會に果して一等賞。

僕は小説家でもないから筆はまはらぬ。をとめ畫を見たいと思ふ人は。僕の畫室に來て見玉へ。壁には少女が捨てゝいつた。草花も今

にかゝつて居る。

仇し野の露

髪結ふ頃になりたらば
かざしてたもれ母様よ
薔薇のはなの花かざし
五つにならば父さまよ
やつてくだされ學校へ
御本も買てたまはれと
縋りしあの手あの目元
花はづかしき面かげも
夢と消行くはかなさよ

○

思へばすきしはつ日前
　蝶よ花よといとし子の
笑みし面わも有にしを
　情なかりける世とは謂へ
風の心地とうちふせし
　かりの病もかりならで
日に縮みゆく玉の緒を
　繋ぎ留なんよしもがな

○

おもきやまひの枕邊に
　ながら父母やはらからは
　夜の目も合はず一筋に

かみにこひのみ榊葉の
　常盤堅盤といのれども
　其甲斐なくて暮わたる
かねを此世の聞おさめ
　行すゑしれぬ死出の山
　たどる闇路や暗からん

○

浪風あらきうき世とて
　早くも神のいざなひし
身を切る風にも梅薫り
　磯うつ浪にも月やどり
岩にせかるゝたに川も

錦おどりすことあるに

○

神よ僅かのよはひをば
何とてなれに授けしぞ
授けられしぞ怨みなる

紀念(かたみ)にのこる花かざし
手函のうちにその儘に
殘るを見るも悲しくて

朝ゆふなげく父はゝの
涙よもしもたまわらば
流れてゆけよ苦のした

○

嵐にちりしくはるの花
野分にしほるゝ秋萩も
また來ん春に咲くものを
また來ん秋に咲くものを
再び去りてまた來べき
よしなき汝こそ哀なれ

貸二階

（上）

予が家は南農人町の谷町を西に入つた處の南側にある。予が家の隣は近所の小供を御得意にして居る駄菓子屋で。後家と娘との女暮し(おんなぐら)であつた。後家と娘の女暮しといへば聞耳立てる人の多いのに。其

菓子店の小障子に『二階貸します』といふ札が掛つて居るので。内々指ざしをする者もあつた。或日曜の事。顔の赤い兵卒が來て。四角張つた物の言ひ樣で。似合はしからぬ縮緬の袱紗に包んだ紙入の中から。名刺と共に銀貨を一つ二つ取り出して後家に渡して歸つたが。其翌日から『二階貸します』の札が取りはづされた。

次ぎの水曜日には彼の兵卒が同じ服の連れ一人をやつて來た。後家は貴人の樣に取り持つてチヤホヤ云うて二階に上らせた。やがて娘は谷町の牛肉店に走つて行つたが。其の行道に云うておいたのか。酒屋の小僧が娘より先に一升德利を持つて來た。娘は大きな竹の皮の包を持て歸つて來た時。後家はカンテキを忙がしう扇いで居た。何時間か經つて二人の兵卒は猿の樣に赤うなつて。劍の帶皮を卷さながら下りて來て。後家が揃へた靴を手もかけずに穿いて。お蝶さん。と娘の名を呼んで何やらかうて出て行つた。

其からは日曜水曜毎に二人。三人。是等陸軍々人がやつて來て。駄菓子の得意客の可愛らしい子供を驚かせた。二階では其度毎に。怪しげな歌の聲。間違うて居るらしい詩吟の聲。高笑ひの聲。ジヤンケンの聲。間にはお蝶のキヤアといふ聲も聞えた。お蝶は店に來る子供等の味方になつて。此名譽ある軍人を敵にして厭がつたが。後家は其れを言ひ慰めて水曜日曜を五つ六つ過した。

甲斐々々しい後家の行屆いた拭き掃除に椽も柱もピカ〳〵と艶の出る程であつた家が。劍の先で疵を付けられ。靴の踵で蹈み缺かれ。一月程の間に店の見込が眼立つて變つて來たやうであつたが。それでも案外もうかるかして。後家のチヤホヤ云ふのは少しも變らなんだ。然し或時凄まじい音がして。二階の梯子段に大きな穴が明いて

强さうな顔の兵卒が眞倒樣に倒落ちて。下にあつた三絃の胴を折つたのには。流石の後家もチヤホヤ言ふに言はれなんだと見ゐて『是じやから私が云はぬ事か』と娘に叱られるやうに言はれた。

其次の日曜からは此駄菓子屋の上り口に一足の靴も見ゐず。小供等は元の通り心置きなく店の前を遊び場にした。そして『二階貸します』の札が再た表に張り付けられた。半月ばかり經つて。其札が又取られた日。色の白い。柔和な。上品な。服裝の立派な。若い人が住み込んだ。是は店の小さい得意客の仲間には別段反對の運動もなく。お蝶も至極機嫌が好かつたが。眼敏く見付けた近所の若い者共其夜の夜話にあられもない噂をした。

引移りの祝とも云ひさうに。其晩は後家も娘も二階に呼ばれて。しめやかな酒事があつたらしかつた。そして草臥たといふものか。早

うに寢て仕舞つたらしかつた。處が翌朝になつて後家と娘が叫ぶやうに驚いた聲が聞ゐた。何事かと行つて見たれば。昨日の柔和な上品な人が夜の間に姿を置したとの事であつた。そして衣類其外失せ物が大分との事であつた。後家と娘とが驚いて叫んだも尤もであつた。

（下）

それからは例の札は掛けられなんだが。傳を以て身元の知れた人を置く事になつたらしかつた。又半月ばかりたつて。六十ばかりの婆アさんと洋服姿の若い男とが出入する樣になつた。後で聞けば其婆樣は按摩であつて。若い男は其孫で。學校の教師をして居るとの事であつた。お蝶も子供等も先生々々と云うて懷く程なれば。可愛らしい宜い男であつた。婆樣と先生とは職業の違ふだけに服裝も言

葉付きも其外萬の事も違うて。祖母孫の間柄とは何うしても見えなんだ。

婆樣は毎日毎晩稼ぐ一方。無駄な物一つ買はぬ。一つ食はず。僅かの賃錢の中から小金を貯めて居るに。先生中は々それに似ず。小い箱の中から卷煙草を出して。それを店の火鉢で吸付けて學校に行くのが毎朝の事であるが。其卷煙草は西洋ので一本五厘もするとか。と或日後家が予に話した。

お蝶は何かと親切に先生の世話をして居たが。先生が折々夜を徹す事もあり。泊つて戻る事もあるので。そろ〳〵信用を失うて來たらしく。裏空になつても。婆樣は綴つた綿入羽織で一晩かゝさず仕事に行くのに。先生はだん〳〵遊び癖が付いて來て。どろ〳〵に醉うて戻つて來るもめづらしう無い樣になつたとの話であつた。そして

席料なんかも皆婆樣の懷から出て。先生の月給は此頃新調した柄のよい洋服と。美しい襟かざりと絹のハンケチとの外。何うなつて消えてしまふか分らぬ。との事であつた。

月給の消えてしまふばかりではなく。折々は婆樣の繼ぎ袋の口から先生の手に渡される物もある。入らぬ世話ながら齒がゆうてならぬと或時後家が娘と話して居るのを聞いた事もあつた。其外後家の話を聞けば。婆樣は折々泣いて賴むやうに孫に意見して居るとの事であつた。然し先生の不身持は少しも直らぬらしく。二三日も續いて姿を見ぬ事があつた。其時には婆樣は一人でシク〳〵泣いて只氣遣うてばつかり居つたとの事。

心配からか婆樣はとう〳〵病氣になつて。一晩もかゝさなかつた按摩を我が身に仕て貰ふ樣な身になつたのに。先生は矢ッ張り遊び廻